

# R18にならないへくぐだ 集

なまきいろ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある掲示板に投稿していたへくぐだネタまとめ

おおよそぐだ男イメージで書いていますがぐだ子イメージでも大丈夫なように書いています（一部除く）

# 目次

第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	R18にならないへくぐりだ集
111	102	93	85	75	66	51	38	24	12	1



## R18にならないヘクぐだ集

ヘクトール「マスター見てると自分の子供もこれくらいならうなんて思っちゃうんだよねえ」

ぐだ男「……………俺は、好きだよ。ヘクトールのこと。父親みたいじゃなくて、恋として」

ヘクトール「oh」

ぐだ男（♀）「女の子になった」

ヘクトール「マスターはマスターらしくしてくれれば性別は別に、とは言っても、動揺してなさすぎじゃありませんかい？」

ぐだ男（♀）「困ったなって最初は思ったけど、これならお嫁さんにしてくれるかなって」

ヘクトール「……大変光栄ですがオジサンはあの時代にしては珍しく嫁さん一筋だつてことで有名で、マスターを嫁にしたら霊基が歪むかもく？なんて？」

ぐだ男（♀）「えう……。なら愛人さんでいいから。なんなら娼婦」

ヘクトール「それもどうかと……………」

ぐだ男(♀)「えうううううう」

推しCPを狭いところに閉じ込めたい

～ヘクトールと狭いところに閉じこめられたって「マスターはあつかいなあ。子供体温だなあ」ってぐだの背中よしよしぽんぽんして終わるからな現役とは

ぐだ「ヘクトール、今の自分は悪い子なんだ」

ヘクトール「ありやあ、とうとう反抗期かあ」

ぐだ「だからいつもはマイルームに待機して皆の話を聞いたりしなきゃいけないのにヘクトールの部屋に泊まるんだ」

ヘクトール「そりやあ悪い子だ。だけどなマスター、それでも人は選んだほうがいい。オジサンはこれでも」

ぐだ「だからだよ」

ヘクトール「oh」

ヘクトール「マスターはオジサンに恋してるんじゃないやなくて父親恋しさに勘違いして

るんじゃないかい？」

ぐだ「そもそも恋自体が勘違いなんだから勘違いをした時点で恋なんだよ」

ヘクトール「そんな屁理屈誰に吹き込まれたの」

ぐだ「子供は子供なりに小癪で小賢しいものなのさ」

ヘクトール『『本物』に喰われる前に止めときな』

ぐだ「その前にヘクトールが食べてしまえばいい」

ヘクトール「ガキが政治家相手に駆け引きしようなんざ火傷じやすまねえぞ」

ぐだ「燃え尽きる覚悟さ」

「ほらへくとーるーますたーいまべろべろだらよーていこーしないよーなにしたってゆめだったでごまかせちゃうよーほらほらー」とご機嫌に擦り寄ってくるぐだを「はいはい」とマントで巻いて転がしておくヘクトールオジサン現役兼鉄壁

カーマさんがいくらぐだに「私がいくらでも愛してあげるんだから他の愛なんていらないでしょう?」と言っても「やだあ、ヘクトールがいい……。ヘクトールに愛を渡してヘクトールの愛が欲しい……」と言って聞かないこと数時間「どんな調教したんですか貴方!!!」とキレ寄られるヘクトール「違うんです」

国民の処女は王のものらしいのでぐだもマシユも王さまにただかれるのです

ヘクトール「いやー！残念！オジサンまだ王子だからなあ！オジサンまだ王子だからなあ!!」

ぐだ「おのれえ……」

ヘクトール「お嫁さんつてのは幸せで幸せで幸せな時にならないといけないんだよマスター」

ぐだ「妻子持ちのくせに童帝みたいなことを」

ぐだ「実際パラケルススの虚無の塵風かき氷つてどうだった？」

ヘクトール「すっごい虚無」

ぐだ「ヘクトールもカルデアに従者さんがいないから一人で全部してるだけで本当は誰かにお世話されるのが当たり前だったの王子さま。髪とかかしますよ王子さま。リボンもつけますよ王子さま」

ヘクトール「だとしてもマスターにはやらせません」



ぐだ「ええ……」

ぐだ「便乗して話をするとはぐだで検索すると概ねぐだ子でぐだ男は割りと少ない」

ヘクトール「オジサンのバレンタインとか完全に乙女ゲー文脈だからかな」

ぐだ「ぐだ♂へくだと少し増える。おっさん受け強し」

ヘクトール「!?!」

ぐだ「アキレウスとは実装前から地道に活動している人が見受けられたけど実装されたら大幅に増えた」

ヘクトール「まだ実際絡んでない! マスタールームにいた時に石投げただけ!」

ぐだ「アキレウスと仲良くしてるの嫌だった?」

ヘクトール「そこはノーコメントで」

ぐだ「言つてよー」

(流れがエロ本が見つかったのだ)

ヘクトール「マスターもお年頃だねえ。心身が健全なのはいいことだと思っぜ?」

ぐだ「そのお年頃真つ盛りを生殺しにしているのは悪いことだと思っぜ?」

ヘクトール「最初がオジサンじゃ性癖狂いまくって後の人生マズイだろ？オジサンなりの優しささあ」

ぐだ「お前に惚れた時点でこれ以上ないくらい狂っているから安心しろ。目一杯爛れようぜ」

ヘクトール「ええ……」

ヘクトール「マスターはサブフェスに乗じてオジサンとのラブな本を一冊くらい描くかと思ってた」

ぐだ「本命c pはネタ出しの段階で冷静になれないから人様に見せられる形にならない。お金もらえない」

ヘクトール「一位取るのが第一ならそれじゃあ確かに駄目だな」

ぐだ「ヘクトールがこっち見て愛しげに微笑んで愛を囁いてくれるとか自分一人で描いても照れと現実との差の虚無でテンションジェットコースターでのたうち回って完成させられるか否かのデッドアライブだというのにそれを更に邪ンヌやマシユやロビンたちも見ることになるとかやめろ!!その顔は軽々しく誰にでも見せていいものじゃない!!!きよひーよろしく化けるぞちくしょう!やめろ!!!」

ヘクトール「ステイ。マスターステイ。帰ってきて」

黒ひげ「マスターにあんなにラブコールされてるんだから一回くらい応えてあげればいいじゃないですか先生のいけず」

ヘクトール「その一回が命取りになりかねないんでしょーがああの年頃とあの舞い上がり方は情けは悪」

黒ひげ「でもちよーつとは流されてみたいと思いません？」

ヘクトール「思わなくもないけど、あ、こっからオフね」「思わなくもないけどいぎ押し倒されたら「そんなつもりじゃなかった」って泣き出す浮かれ方だろ今のマスターって。正直そういうの可愛いと思うし見たいと思うけどな」

黒ひげ「涼しい顔していい妄想してるじゃねえか」

ぐだ「ジークにヘクトールのどこが好きかと聞かれた」

ヘクトール「へえ？どこって？やっぱり大人の色香とか包容力とかかい？」

ぐだ「……………分かんない」

ヘクトール「はい？」

ぐだ「分かんないから、答えられなくて、でも好き」

ヘクトール「随分ふわっふわだねえ。ま、年端もいかない恋なんてそんなも」

ぐだ「すごくない？理由もないのに好きで大好きでそれしか見えなくて他なんて考えられなくて、ただただ欲しくて渡したくてたまらない。これ以上が自分の中に出来てしまふならばち切れて粉微塵になってしまいそう」

ヘクトール「……じゃあ今は、散らない程度に好きでいてください」

ぐだ「ジークはえっちなの？」

ジーク（端末）「少なくとも「俺」にはそういう記憶は渡されていないな。マスターとはそういうことをする必要はないと判断したんだろう」

ぐだ「そっかあ」

ジーク「マスターが望むなら今から学ぶことも可能だが」

ぐだ「そういうのはヘクトールにお願いするから大丈夫」

ヘクトール「しませんけどね!？」

（流れがおじロリだった）

ぐだ「あと10歳、いや5歳でも若かったら需要があつたの!？」

ヘクトール「オジサンのパパ気取りが強くなつてただけじゃねえかなあ」

ぐだ「パパあゝ。欲しい鞆があるからいっぱい可愛がついていいよ」

ヘクトール「絵本読んであげるから温かくして寝ましようねくくくく」

ぐだ「ダンスパーティーで王子様に一目惚れされるシンデレラコース！」

ヘクトール「誠心誠意エスコートして差し上げましょう。良い子は日付が変わる前に帰りなよ」

ぐだ「ガラスの靴を置いてくから、探してね」

ヘクトール「魔法が切れたらこんなオジサンにはマスターのほうから幻滅するさ」

ぐだ「幻と消えるからこそ一緒に燃え尽きる覚悟で恋をしてるんだよ」

ヘクトール「一緒に消えられたら今の俺が命かけてる意味ないんだがなあ」

ぐだ「まあまあとりあえずご一曲」

ヘクトール「ゆるりと踊るとしましょうか」

ぐだ「ロビンが「男なんて皆単純なんだから露出高い服で部屋に突撃すれば一発よ」って言ってたのに秒でマントの簀巻きにされた。騙された。訴訟も辞さない」

ヘクトール「ロビン君今からカルデアの外で正座してきて。3時間くらい。キンキンに頭冷やしてきなさい」

ロビン「あれ、かつちり着こんだ制服を滅茶苦茶に乱したいタイプでした？でもそれ

ならとつくに襲ってますよねえ？」

ヘクトール「5 時間追加」

ヘクトール「マスターあんな悪い笑顔どこで覚えたの」

ぐだ「オケアノスのヘクトールかなあ」

ヘクトール「あ、あ、っ!？」

ぐだ「はあん、面白いじゃないか、小娘君。

若い命を散らせるのはオジサンとしても本意じゃないが

世界はいつだって、そんな風に残酷なんだよね。

さあ、残酷なものを見せてあげよう！」

ヘクトール「やめえ！やめてえ！頑張つてやつた悪役今更掘り返されるの恥ずかしいなんてもんじゃない!!」

ぐだ「コミカライズでそろそろ破滅願望ではっちゃけてるヘクトールが出てくるね」

ワクワクニコニコ

ヘクトール「やだあああああ」

邪ンヌ「経験者として言っておくわ。しぬほど恥ずかしいわよ」

ぐだ「普段から幸薄そうなサンソンが更に薄々になってたりマルタさんも居心地悪そ

うだったりしてたね」

ヘクトール「それに比べてうちの特に気にすることのなさそうな面々ときたら！」

ぐだ「くろひーとか更に煽ってきそうだもんね」

ヘクトール「……メディア（大人）とでも飲みに行くかなあ」

ぐだ「あれはあれでかつこよかつたのにー」

ぐだ「ヘクトールの匂い好き。安心する」

ヘクトール「ん〜？お父さん煙草吸ってました？」

ぐだ「ううん。父さんも母さんも吸ってないよ。ヘクトールの匂いだから好き」

ヘクトール「ありや、そいつは悪い刷り込みをしちまったな。申し訳なさで会わせる顔がない」

ぐだ「そんなことないよ。会いに行こうよ。ちゃんと紹介するからさ。ヘクトールかつこいいい人だから二人も好きになつてくれるよ」

ヘクトール「いやあ、そうは言ってもオジサンマスターの親と大して変わらないでしょ？倒れると思うぜ？」

ぐだ「そんなことないもんー」

ヘクトール「いやいや親の心つてのはねー」

## 第2話

ぐだ「メカクシしたらバーソロミューが召喚されやすいかもだつて！」

ヘクトール「俺はマスターの綺麗な目はいつも両方見えてるほうが嬉しいけどなあ」

ぐだ「そういうところだぞばーーーーーか!!!」

ぐだ「昨日ヘクトールの部屋に行ったらマツサージしてくれた」

アキレウス「お、いつになく良さげな流れじゃねえか」

ぐだ「アロマ焚いてくれたりオイルが温かかったり知らずに凝つてたところが  
ぐーーーーつて伸びて気持ち良くなって」

アキレウス「おうおう」

ぐだ「起きたの今」ツヤツヤ

アキレウス「何がしてえのあのオッサン」

ケイローン「労りたかつたんじゃ不是吗か？」

「自らが施したマツサージでコンディション最高のマスターが起床後すぐに仇敵と  
会っている件について、感想をお聞かせ願えますかヘクトール殿？」



「へクトール「可愛いでしょ？俺のこと大好きなマスター」

ぐだ「薄い本みたいに「いけないトロイアだ」とか言って自分好みに調教してもいいんだよ。薄い本みたいに薄い本みたいに」

へクトール「国って粹のために法律作ったりするのは必要な義務だと思うが在り方そのものを強制するのは王族とはいえ傲慢じゃねえかなあ」

ぐだ「ぐあっ！」

へクトール「オジサンが最古の王様みたいな「国の全ては我の物！」ってなタイプにや見えんでしょ」

ぐだ「見えないけどー！見えないけどー!!」

へクトール「（王族は国に仕える国の物だから俺のことはマスターが好きにしているんですよ。とは思っちゃいるが、それは望みとは違うんだろうねえ）」

ぐだ「キルケーから魅了の魔術教えてもらったけど失敗した。へクトールの眉がびくりとも動かなかった」

メディア「あの男は魔力Bだから貴方程度の魔力じゃ成功しても弾かれて当然よ」

ぐだ「ぐぬぬ。「オジサンはマスターのことこれ以上好きになりようがないからなあ」



口付けをしなければ7年間不幸に、口付けをすれば15年間幸せになれる「口付けの小路」というものがあるらしい。

ここにお好みのカップルを放り込んだ妄想をするのは有りじやあなかるうか

ぐだ「ほらあ！キスしないと大事なトロイアが不幸になっちゃうよほらあ！」

ヘクトール「そいつは困ったなあ。それじやあ（指を自分の唇につけてからぐだの唇に移す）これで3年くらいもちませんかね」

ぐだ「……………」

ヘクトール「（流石に子供騙しすぎたかな？）」

ぐだ「……………はっ！あうっ！ああ……………うぐつ、えにゃくくくくく、あ……………自分のチヨロさが憎い!!!」

ヘクトール「はっはっはー。じやあ帰りますかー」

ヘクトール「マスターなら俺の隣で寝てるぜ」ドヤア

マシユ「流石対先輩寝かしつけEXのヘクトールさん。最近上手く眠れないとぼやいていた先輩がとて安らかですやつすやです」

現パ口ですか

アウトレイジやバートロイアのような危ない橋だったり怪しい仕事だったりして  
ヘクトールおじさんが家に帰るといつも屈託なく「おかえり」と迎えてくれるぐだに  
だけ見せる優しい笑顔などに夢を見ています

大切なたつたひとつのためならどんなことでも出来ちゃうおじさんが何をしている  
かぐだが知っていても知らなくても美味しいです

問題はこのシチュの果てにあるのは死別である確率が非常に高いことですね

ぐだ「株式会社トロイアの専務（実質社長）ヘクトールとバイト高校生藤丸立香との  
イケナイラブな現パロをですね」

ヘクトール「未成年相手にいい年いい身分のおっさんがパワハラ& a m p ;セクハラ  
かあ。現代社会じゃ二度と陽の目を当てちゃならねえ下衆野郎だな。生かしておけ  
え」

ぐだ「滅多に見れないマジ顔マジトーンはかっこいいけどそのようなりアリティなど  
求めちゃいけないのです!!!」

なんとなく立ち寄ったコンビニでそういえばなんか流行ってるなってなんとなく  
ピオカミルクティーを買ったところを生徒ぐだに見られて「先生も好きなんですか？一

緒ですね」つて笑いかけられるヘクトール先生ええええええ

ぐだ「奥さんも子供もいた人に振り向いてほしいと思うのはNTRかな」

ヘクトール「人妻はいけませんよマスター。とはいえ、サーヴァントなんて似て非なる者だからそこまで深く考えなくてもいいんじゃないですかね」

ぐだ「でもそれで地獄に落ちるとしても今の自分じゃ止められない気持ちだから覚悟決めるしかないかなって」

ヘクトール「若い子は分かりもしないくせに分かってるかのようすーぐそういう大げさなこと言うー」

ぐだ「地獄に似たものならいくらでも見てきたつもりだけど、それでもそれよりもずっと厳しい場所かな。その時になったらやっぱり後悔するものかな。でも今だって後悔したくないよ」

ヘクトール「まあそもそも、大事なマスターを地獄になんざ渡す気はないんだがな」  
ぐだ「手え出してくれないくせそういうことばっか言ってくるんだからもー、もー、もー」

ヘクトール「しかしまあ、マスターがマジでNTRに目覚められるよりだったらカルデアにいる今は未亡人カテゴリーに入らんでもない俺で止まってもらってたほうがいく

らでも気楽なんだよな……。問題は現代社会に戻ってからどう転ぶかってところだが」

メディアリリイ「そんな属性関係なくマスターはただ貴方が好きなだけだと思っ  
てすが……」

メディア(大人)「NTRで国が滅んだもんだからそのあたりはマジになっちゃわ  
ね」

ラーマ「出会って一週間ほどのラクシユミーとわずかなアイコンタクトで待ち合わせ  
場所と時間を決められるとは流石だなマスター」

ぐだ「場数だけなら踏んできたからこれくらいはね」

ラーマ「そうか。ならば馴染みの深いサーヴァント相手なら正に阿吽というやつか  
ぐだ「それでもないよ。付き合い長いとこつちが考えてる間に何がしたいか読まれ  
て決めた頃には全部終わってるとかやられちゃう。おまけとばかりに自分が考えてる  
ことの先の先まで片付いてる時もある。ヘクトールとかヘクトールとかヘクトールと  
かそういう男」

ラーマ「ああー……」

ぐだ「出来すぎる人を隣に置くってのもしんどいもんだねー。でも助かってるしいて  
ほしいけど」

ヘクトール「なんだいマスター。オジサンとアイコンタクトしたかったのかい？」  
ぐだ「んぎゃ!？」

ヘクトール「いいでしょう。マスターの国では目は口ほどに物を言うと言うらしいですしね。何でも言ってくださいよ」

ぐだ「うつ」

ヘクトール「(じい)」

ぐだ「うつ……」

ヘクトール「(じいいいい)」

ぐだ「えうううううううう、」

ヘクトール「(にこっ)」

ぐだ「ぎゃあ!ヘクトールの馬鹿!意地悪!もういい!マシユのところ行くーーー!!」

ヘクトール「おやまあ、本当に可愛らしいことで」  
ラーマ「若者の幼い純情であまり遊ぶんじゃない」

ぐだ「ハーレムかあ……。ん、うん!ごほん!……抱いてくれるなら側室でもかまわないよ、俺は(エミヤの声マネ)」

ヘクトール「オジサン側室の愛しかた知らないからパス」

ぐだ「正妻のように愛されるのは流石に気が引ける」

ヘクトール「マスターはマスターとして愛します」

ぐだ「bartロイアがおっさんたちの吹き溜まりだって!」

ヘクトール「誰もそこまで言つてませんよ。けどまあbartつて時点で年齢制限かか  
るし常連があれだったりあれだったりするから女性が入りづらい空気出てるかもしれ  
ないし、……………あれ？」

ぐだ「ふふん。ここは推定成人の健全な若人が常連になることによつて清涼化の突破  
口になろうじやありませんか」

ヘクトール「危ないからマスターは出禁ね」

ぐだ「にびやあ!」

マシユ「年末に皆さんとお別れして最後のヘクトールさんまで笑顔で見送つた後に  
「明日からも大変だからもう休もうか」とあっさり告げて一人でマイルームに戻つてか  
ら一晩中泣き明かして明け方酷い顔になつていたのを査問会の人たちがくるまでにとど  
うにかぎりぎりアウトなところまで直した時の話を当時の画像と動画付きでしましよ



うか？」

ヘクトール「待つて抱き締めにいかない自制心作るから5秒待つて」

ホームズ「ミス・キリエライト、人が秘匿しておきたい部分を語ることもだが画像と動画とは何かね。マスターのプライベートと誇りのためにもコピー含めて全て提出するように」

ぐだ「マスター礼装にアロハがあつて虚無の塵風かき氷でヘクトールもアロハ着てた！お揃い！今年こそペアルックで常夏デートリベンジ！」

ヘクトール「原稿修羅場ループの中にそんな時間があると？」

ぐだ「どうにか作る！邪ンヌに一回焼かれる覚悟で！」

ヘクトール「やめとけやめとけ。差し入れ持つてやるから大人しく頑張りなさい」

ぐだ「ぐーぬー、最高級スイートルームにふさわしい最高級スイーツを差し入れろよ馬鹿——」

ヘクトール「へいへい了解ですよ」

邪ンヌ「え？あんたたちのその生殺しいちやつき修羅場でまで見せられるの嫌なんですけど」

ぐだ「昔の歌に「セクシーなの？ キュートなの？ どっちが好きなの？」ってあったけどあれが本当にそれすぎてもう、何着てこう」

ロビン「男ならやっぱり露出高めに脱がしやすく」

ぐだ「という甘言をそのまま受け取り待ち合わせ場所に行った途端ヘクトールに呆れ顔でジャケットをかけられたわけですよ」

ロビン「まさか二度も騙されるとは。でもそれはそれで萌えシチュュじゃないですか」  
ぐだ「はい。匂いとぬくもり最高でした」

ヘクトール「若さに慢心して冷える格好するのはオジサン的にはいただけないなあ。ロビンは後で指導室に来るように。あと件の歌を昔の歌って言うとかダメージ受ける人が多いと思うから禁止ね禁止」

ぐだ「ヘクトールがシャワー浴びてる時にヘクトールの服のサイズってどれだけだろうって着てみたら思う以上にぶかぶかですごいなーってはしゃいでたらシャワー終わったヘクトールがすごい形相しててやっぱり人の服勝手に着るのは失礼だったかなって反省中」

ロビン「それ全力で理性総動員させてる顔」

黒ひげ「マスターは押せ押せのくせに肝心なところで天然さんですな」

ぐだ「弱小城主がなんぼのもんじやい！こちとら防衛戦に関してなら泣いても許してもらえないくらい徹底的に叩き込まれてるんじやー！！終わったらご褒美にちゅーくらいされたい！」

のつぶ「そうやって勢いで迫って場所の指定もせんからずるいおっさんに額とかで誤魔化されるんじやぞマスター」

マシユ「しかもそれでふにやふにやになってしまっピユアハートさんですからね」

ぐだ「全部が終わっても一年に一回でいいから会いに来てよ」

ヘクトール「そんな残酷な期待の持たせかたなんてさせられない。二度と会いに来ない。先が開けたなら振り返るな。ちゃんと前を見て、未来を歩くといい」

## 第3話

びふおー

ぐだ「んふふ。ヘクトールはあれで気にしいだからオケアノスの話となると今でもちよつと気まずそうにするんだよねえ。可愛いよねえ。コミカライズで本格的に戦闘が始まったらいっぱいからかつてやろーつと」

マシユ「先輩つてばヘクトールさんには意地悪なんですから。ほどほどにしてあげてくださいいね」

あふたー

マシユ「ヘクトールさん大変です！先輩が！先輩が息してません！」

ジーク「すぐに来てくれ！貴方がマスターの傍で手を握つていてくれたらきつと力になる！」

ヘクトール「今回に限つてはトドメになるんじゃないかねえかなあそれ！」

推しの「唇以外ではパートナーのどこに特に口付けするのが好きか」

〜ぐだ「唇以外も何もまず唇にされたい」

ヘクトール「でも唇以外だしなあ。どこがいい？」

ぐだ「は？」

ヘクトール「今日は特別。額？頬？耳？」

ぐだ「え？へ？え？」

ヘクトール「首？肩？背中？鎖骨？」

ぐだ「あ……、ひゃわ、」

ヘクトール「胸？腹？脚？それとも、」

ぐだ「わああああああ！みぎやああああああ!!!」バタバタバタバタ

ヘクトール「やーれやれ。逃げられちまった」

ロビン「でもぶっっちゃけあれのままいたくのは絶対楽しい」

ヘクトール「やめなさいっての。ったくどうなってんだよ現代日本の情操教育」

式「いやあれは特殊例だから」

ぐだ「邪ンヌさん！海外から帰国したちよつとフランクな血が繋がってるようないな  
いようなフリーダムなオジサン下さい!!!」

邪ンヌ「人の黒歴史を大声で叫ぶんじゃないわよ！勝手に貰っていきなさい！」

アキレウス（狂）「内臓出てくるまで引き摺り回したかったのによお！」  
ヘクトール「ステイステイ。オジサンのこと大好きなマスターが流石に泣いちゃうからその話は違うところでね？」

ぐだ「やはり王族にはそういう人（性奴隷）がいたりしたりしてたりさせたりしたのでしょうか」ワクワクソワソワソワカソワカ

ヘクトール「オジサン奥さん一筋だったのでいませんでした！もー誰えー！毎回毎回キスにも慣れてない幼児にこういうの吹き込む人ー！！！！愉悦!?性癖!？」

ぐだ「俺のヘクトー、いや、私、自分の、僕、うち、あたし……………うああ！ヘクトールかっこいいいいいいいい」

マシユ「先輩落ち着いて！まず深呼吸して一人称を安定させてください！オケアノスのヘクトールさんの本気はまだまだこれからなんですから今からそんな調子じゃ」

ぐだ「灰になってしまふ……………」

黒髭「先生マスターになんて調教を？」

ヘクトール「濡れ衣です……………」

（カワグチ先生がツイッターにあげていたヘクトールの下書きがかっこよかった）

ぐだ「メイヴちゃんのサイン飾ってるの？」

ヘクトール「足止め作戦のためとはいえせっかくのルルハワの戦利品ですしねえ」

ぐだ「ふうん？」

ヘクトール「ご不満で？」

ぐだ「ううん……」

ヘクトール「マスターが嫌なら外してもいいけど」

ぐだ「んんんんんん、それは駄目！今練習して同じくらい上手いサイン書くから隣に

飾って！」

ヘクトール「マスターのそういういい子なとこオジサン好きだなあ」

（メイヴちゃんのサインのレベルの高さに気付くのにそれから1時間も必要としませんでした）

ヘクトール「うーん、オジサンなーんか熱っぽいなあ。今日は休むからあとよろしく」

ぐだ「もー、そういうこと言ってすぐサボる〜」

ヘクトール「お見舞いはメロンにしてくれたまえ〜」

ぐだ「もー、……むう、メロン、あったかな」

ヘクトール「……で、どうなの進捗は。マスターまだ気付いてないけどこのまま処理出来そう？」

槍ニキ「おっさん本当に具合悪いなら休んでろよ」

ぐだ「……ヘクトールはカワグチ先生と寝たの？」

ヘクトール「何がどうなってそういう発想に!？」

マシユ「すみません!カワグチ先生が最近ヘクトールさんの下描きをよく上げるようになって先輩の回路が複数オーバーヒートしてしまったみたいで!」

ダビデ「彼はオケアノスシナリオの全般的に手広く出番があるからねえ。これでもまだ序の口さ。あ、生命保険に入っておくかい?今からでも間に合うよ?」

ぐだ「まずは書面の確認を……。話はそれからだ……」

ダビデ「オーケーオーケー。大事なことだからね。隅から隅までしっかり確認するといい」

マシユ「これから何度先輩は死んでダビデさんは総額いくら支払うことになるんでしょう……」

ダビデ「何度死のうとも破産しないシステムにはしてあるから僕の心配はしなくてい



いよ」

ぐだ「ならばよし」

ヘクトール「ええ……」

ぐだ「起きたら私がオレになつてるとオレが私になつてるとはどっちがそそる？  
それによつて動きが変わる」

ヘクトール「マスターが望む姿で心から笑っているならそれで愛すべき守りたいもの  
だよ」

ぐだ「またそういう無難な模範解答ではぐらかす」

ヘクトール「でもマスターだつてオジサンがオバサンでも大差ないだろ？」

ぐだ「……………好き」

ヘクトール「(にこー)」

ぐだ「絶対おっぱいおつきいよね。埋もれたい」

ヘクトール「何を根拠に？」

新茶「カジノでマスター君が案の定カモられてて大変な負債になつてしまつてね。ここは私が悪の黒幕らしくちよいちよいと場を操作してマスター君の負債をなかつたこ

とにしつつほんのちよつぴり小遣い稼ぎをしようと思つてたらね、出てきたんだよ。ヘクトールが。「席あつたためてくれてありがとなマスター」とか言つておいおいいくら政治家で將軍だったからといっても戦場と賭場では違うだろと見てたんだがこれがまあプロすら見逃すイカサマ手捌きとフィールドコントロールで見事に場が引つくり返つていつて私は楽しかったがディーラーたちは生きたまま首を落とされ続けたような心地だつたらうねえ。あつという間に負債は完済。デート代まできつちり稼いでからの鮮やかな退場でちよつと彼本当は何者なんだろうねえ。さあてマスター君も無事帰れたことだし、ここからは私が稼がせてもらおうかね」

ぐだ「普段は「そんなことないよー」つてはぐらかしてたけどいつも皆に「可愛い」とか「エロい」とか言われてちよつとでも浮かれて調子乗つてたことをここに白状をします。あんな可愛い美少女弟と毎日過ごしてたならそりゃあ自分なんてくず石ですよ。鼻で笑う価値もない砂粒ですよ。相手にされなくて当然だったんですよ……。ちよつとしばらく籠つて反省します」

ヘクトール「ま、マスターは可愛いよ！綺麗だよ！他に例のない輝きがあるんだよ！あんな愚弟と比べるなんてこつちがおこがましい！俺はマスターがいい!!!」

ロビン「(必死)」

マシユ「(今まで見たことないくらい必死です)」

ヘクトール「マスターはオジサンがいきなりシヨタになっても愛してくれるかい……」

ぐだ「黒髭のような紳士的な愛に努めたいですがあまり理性に期待しないでください」

ヘクトール「ひえ」

アポロン「今年のクリスマスはパリスちゃんがサンタで決定です。ドウムジがサンタを作るのなら私だって作れます。羊なので」

パリス「よろしくお願いします！」

ヘクトール「というわけでマスター、オジサン手伝いでトナカイやるから(色々諦めた顔)」

ぐだ「お揃いだ」

ヘクトール「司令部だの古参組だのと打ち合わせで歩き回って疲れて部屋に戻ってきたらマスターがベッドを占領してるのはかまわないとして愚弟と一緒に寝てるのは納

得いかねえ……」

ぐだ「自分もアポロン様やパリス君になりたいー！！眼鏡でかつこいい優しい眼差しに見守られてひとときを過ごしたいー！！！！ずるいー！！！！」

ヘクトール「マスターはマスターのままできてえ!? つていうかオジサンマスターのことも目一杯優しくしてるつもりなんですけどお!」

ぐだ「もつといちやいちゃしたいー！！！！」

ぐだ「というわけでおつきーに敗北した上にQPが支払いきれなくなった我々はこうして備品バニーとして働いているのです」

ヘクトール「設定が大渋滞すぎやしませんかね……。ちよつと支配人く、この子たちの負債額いくら? その5倍で、ん? 足りない? じゃあその分は、勝負といこうや」

ぐだ「メジエド様の布の中に二人で入っていちやいちゃするとかロツカープレイ的な簡易密着密室みたいなドキドキがあつていいと思うんですよ。ほらほら入ってきて」  
ヘクトール「わーマスターさては疲れてるなあ? 根本からギュツと縛つてベッドに転がしておくから落ち着くまで寝てな〜?」

ヘクトール「マスター昨日マシユと手え繋いでたつて？ひゅーひゅー」

ぐだ「小学生かな!?別に手え繋ぐくらい特別なことじゃない普通のことでしょ」

ヘクトール「じゃあオジサンとも手え繋ぐ？」

ぐだ「え？それ、それは……、責任取つて結婚するしかない？」

ヘクトール「この学童以下！」

ぐだ「マーリンの霊衣解放したら夜のお誘い貰っちゃった」

ヘクトール「待つて他の鯖だったらマスターに召喚された補正の善性とゆるふわ及びカルデアの秩序のために皆で結んだ不可侵協定である程度野放しに出来るけどその夢魔だけは駄目だ余裕で破る」

ぐだ「パリスがアポロン様一匹貸してくれた。可愛い」

ヘクトール「……えーと、一応それカミサマなので、えーと、」

ぐだ「分かつてるよ。雑には扱わないよ。ねー？」

アポロン「めー」

ヘクトール「(まあ今はただの羊ぶつてるみたいだし大丈夫か)」

アポロン『ヘクトールヘクトール』

ヘクトール「(こいつ、直接脳内に……!-)」

アポロン『パリスちゃんや貴方のような美しさではありませんがマスターもなかなか美しいものがありますね』

ヘクトール「(ぞわっ)」

アポロン『こうやってしばらく様子を見てからマスターにもいづれ一番美しい姿に』  
ヘクトール『後生ですからマスターには何もしないでくれませんかねえ!?お願いします!』

アポロン『ん?今何でもするって』

ヘクトール『言います!何でもします!言いました!何でもしますから!!!』

アポロン「めー(ちよろい)」

ぐだ「?」

ジャンヌ「姉です!」

頼光「母です!」

マシユ「先輩!戦力が拮抗しています!」

ラムダ「何かテコ入れが必要ね」

ぐだ「うーん……、そうだ！」

マシユ「先輩!?どちらに!？」

ぐだ「お姉ちゃん!お母さん!紹介します!婚約者です!」

ジャンヌ「え?」

頼光「な?」

マシユ「は?」

ラムダ「はあ?」

ヘクトール「え?何?オジサンこのシーンで出番あるって聞いてないけど?」

ぐだ「お祝いしてください!」

ジャンヌ「お、お姉ちゃん貴方にそういうのまだ早いと思います!」

頼光「そんなご禁制を堂々と!母は悲しいです!」

マシユ「ヘクトールさんになら安心して任せられると思ってきましたのに!私にも詳し

い説明を!」

ラムダ「あーら、随分つまらない手を使ってくること」

北斎「ますたあ、敵しかいなくなつたぞ?」

ぐだ「おかしいねえ?」

ヘクトール「マスターは人の心がわからない……」

ぐだ「ヘクトール今回の礼装で眼鏡かけてたよね!?眼鏡キラーン!やって!キラーン!

パリス「兄さんも当然兄ビーム撃てますよね!またたくさんの弟や妹に囲まれて暮らしましょう!」

ヘクトール「やらない」

ぐだ「ヘクトールの霊基から遺伝子解析をしてマスターの遺伝子と掛け合わせて子供らしいものを作ることは可能かもしれないってダヴィンチちゃんか」

ヘクトール「暇を持って余した天才なら出来る気はするけどマスターも子供も真つ当に生きられる気がしないからやめような?」

ぐだ「マジレス話といえればおっさんが2回戦以上出来ることがまずファンタジーという悲しいマジレスを見かけたことがあるのですがそのへんどうなんでしょう自称現役オジサンさん」

ヘクトール「ん?人間だった頃の話は今関係ないから置いておくにしてもサーヴァントは基本魔力さえあればいつまでも元氣な全盛期だからねえ」



ぐだ「なるほど。悲しくない現実」

ヘクトール「だからレイシフト先でみたいにマスターが全速力で走り回って指も動かせなくなってる時だって、オジサンは全然元気に息も乱れてないって状態がベッドの上でも起こるわけでね？ あんま調子こいたこと言ってる大変なことになるわけよ？」

ぐだ「あわわわわ」

## 第4話

ぐだ「蠱惑さに定評のあるこのマスター様に何故魅了されぬのだびびびびむ」

ヘクトール「効いてる効いてる。でもオジサンはマスターのことが大好きだからなあ。なでなで許してくれたまえ」

ぐだ「ひやーうみやあ！じやない！解せぬ！」

ぐだ「バーソロミューに「このメカクレヘクトール（別マガ26話より）かつこよくない!」って道連れテロしようとしたら既に黒髭のかつこよさに命尽きてた……自分もそろそろ逝きます……」

マシユ「即死猶予を確保出来るようになったんですね先輩！いつも通り朝ごはんの時間には迎えに来ますのでそれまでには頑張つて生き返ってくださいね！」

ぐだ「ひやい……」

ヘクトール「マシユもすっかり馴れちゃって……」

黒髭「yesロリコンnoタッチの拙者とyesマスターnoタッチの先生に違いな

んざありやしないでしょうー!!! やっぱり趣味同じやねー!!」

ヘクトール「死ね! 殺す! 首撥ねて霊核微塵に砕いてから座ごと跡形もなく爆破する!!!」

ぐだ「やめ、やめたげて!? 何起因かかんないけどヘクトールがそんなに怒るってよっぽどだつてのはわかるけど一旦深呼吸をね!」

ぐだ「ハーレムかあ。ヘクトールならともかく自分がそういうのを持つイメージは全くなかったなあ」

ヘクトール「オジサンも自分がハーレム持つイメージなんて全くないんですけど」

ぐだ「ハーレム1号がここにいます! 奥様には迷惑かけない程度にご奉仕します!」

ヘクトール「マスター、何でオジサンに「マスター」って呼ばれているかも一回ちやんと考えてから発言しような?」

ぐだ「それはそれえ! これはこれなのお〜〜」

ヘクトール「ごねごねしない!」

ぐだ「養豚場の豚を見るような目って元気に育って美味しくな〜れって目?」

ヘクトール「マスターにはずっとマスターのままできてほしいな」

シヨタぐだ男「アポロンさまが明日は同じくらいのヘクトールともいっばいあそべるって言うてたの」

パリス「気付いたらひとりもいなくなっただんです。どこに行っただんでしょう」

ヘクトール「あーすいません。急なジンギスカンの用が出来ましてね？アポロン様はお休みです。だからマスターもパリスもたくさん食べていきな？マスターも明日には戻ってるだろうから3人で本読んで寝ちやおうな」

ぐだパリ「わーい」

アポロン（残骸）「めー……（ちやつかり堪能してるー）」

（2019ギル祭りより）

ぐだ「美少女二人に頼りがいのあるかつこいい背中を見せながら受けるエクスカリバーはさぞ美味しいだろうねえ！味わいなあ！」

ヘクトール「誰であろうと敵に回ったら容赦は微塵もしないマスターのことは素晴らしいと思ってるけどなんかいつもより殺意強くない!？」

ぐだ「気のせいじゃなああああい?」

ぐだ「アキ、アキレウスつよい。アキレウスつよい……」

ヘクトール「わっかるー。そんな頑張りマスターに経験者からのアドバイス」

ぐだ「何!?!何!?!」

ヘクトール「勝とうと思うな」

ぐだ「うええ!?!」

ヘクトール「あれに思考を割く余裕があるなら美味しいもの食べて美味しいーってしての方が断然有意義だぜ? ちようど今ケーキ食べに行こうって話になつててさあ」

ぐだ「いやっ! でも、でもね!?!」

ヘクトール「美少女二人(ブラダマンテガレス)にマスターもいるなんてオジサン幸せー」

ぐだ「でもねー!?!?!」

ぐだ「別マガではまだ藤丸とヘクトールが直接対峙してないから一旦落とすとはいえかろうじて命拾いしているところいきなり教えてで和食食べてたりオジサン好みだつて言い出したりして何なんだよあんたは!?! どれだけ背後からデストロイするのが好きなんだよ!?!」

ヘクトール「な、なんかごめんな? マスターがやつぱり日本料理が一番! つていつも

美味しそうだから興味わいてつい。でも綺麗に箸使えるように頑張ったから見苦しくはないだろ？」

ぐだ「なんであまつさえ死体蹴りしてくるんだばーんか!!!」

ダビデ「墓石に刻む死亡日が増える一方だねえ」

ドウムジ「そろそろマスターも羊になるのでは？」

ぐだ「こちらがドスケベ衣装を着ると問答無用でマントの簀巻きにしてくるのなら逆にヘクトールがドスケベ衣装を着るべきなんじゃないかと」

ヘクトール「そこに需要はあるのかい？」

「くしないと出られない部屋」系なら、

「二人が想像した一番エロいことをしなければ出られない部屋」に閉じ込めたい

「ぐだ「一番エロいこと……?ま、待ってね、今考えるから!……一番?一番?」

ヘクトール「ふーむ。(どう考えてもでこちゅーで落ちるマスターが耐えられるもんじゃねえなあ) マスター、オジサンちよつと頑張つて、霊核砕けてもいい勢いで壁壊してみるからちよつと後ろで待っててな」

ぐだ「嫌なの!?自分とそういうことするのそんなに嫌なの!」

ヘクトール「違う違う。マスターの純潔をこんな誰かの娯楽で散らすべきじゃないって話ですよ」

ぐだ「そうやっていつつも最もらしいこと言うけどさあ!!!」

＜マスターが耐えられないようなこと想像したんですね？

＜マスターのお子様さに遠慮してるだけで現役ですのでそりゃあ

どこいつトロ「ぱりすがキレイなのは、きつとへくとーるに恋をしているからなのニヤ」

パリス「そうです！兄さんは美容にいいんです！」

ぐだ「マジかよ！もっと好きにならなくちや！」

ヘクトール「オジサンにそんな効果ないから早くご飯食べて寝なさい」

ぐだ「なんでウインクなんてした!?なんでこのタイミングでウインクしたのか詳しく言ってみろ！私は今冷静さを欠こうとしている!!!（別マガ27話）」

ヘクトール「あーマスター大分疲れてるなー？もう暖かくして寝なく？」

ぐだ「寝られるか！！！」

ヘクトール「今年はオニランドで遊び疲れたマスターの他にパリスも抱えて帰らにやならんのか……」

ロビン「パパ家族サービスお疲れさん」

ぐだ「ヘクトール今日は一緒に寝よう？」

ヘクトール「どうしてほしくて？」

ぐだ「何もなくていいよ。一緒に寝よう？」

ヘクトール「了解。マスターが望むならその通りに」

ロビン「今日のマスターはなんかおとなしいな」

マシユ「色々（教えてFGO）ありましたから」

ぐだ「ヘクトール。ヘクトールはどんなマスターでいてほしい？」

ヘクトール「マスターはマスターらしくしていたらオジサンそれに従いますよ？」

ぐだ「嘘つき。何も応えてくれないくせに」

ヘクトール「そいつは申し訳ありません。さあ。もう寝ましょう。今日はもう寝てゆつくり休んで、また明日から頑張っていきましょう」

ぐだ「竜属性は卵産むって本当？」



アーサー「んー、どちらにしても男は産まないかなあ？」

ヘクトール「女の子に聞かなかっただけセーフだけだよっぱりアウトかなあ！」

ロビン「まあマスターならセクハラっつーより子供相談室みたいなもんでしょ。セーフセーフ」

ぐだ「ヘクトールなんでマイルームボイスの追加がないの？弟とか知り合いいっぱい増えたよ？」

ヘクトール「マスターと話してるのに何で他の人の話をしないとイケないの？」

ぐだ「おごお！」

お菓子配り歩いてるぐだの前に現れて「調子はどいだい？」って訊ねたらぐだがお菓子渡そうと袋をまさぐってひっくり返してもお菓子がいないことが発覚してぐだが「どうしようどうしよう、いたずらしていいよ！」って言いかけたところで飴ちゃん手渡してきて「危ない危ないオジサンいたずらされちゃうところだったよー」って笑って去っていくのがヘクトールだよ

ぐだ「ヘクトール好きだよ」

ヘクトール「オジサンもマスターのこと大好きだよ」

ぐだ「温度差を感じる」

ヘクトール「えー？」

ヘクトール「拘束？アキレウスがオジサンの足縛って引き摺り回したって話は」

ぐだ「しないで？」

ぐだ男、抱きつかなければ魔力供給できない特異点で男鯖ばかり

ぐだ男「ヘクトールがいない。訴訟」

ヘクトール「帰ったらいつばいぎゆうぎゆうしてあげるから、頑張ろうな？」

ぐだ男「いにやああああ！ヘクトールがいいのおおおおお！」

ヘクトール「あんまりごねると他の人に失礼だから！ね！」

ぐだ「いつもへらへらしてるくせに素っ気ないヘクトールだけどたまにいきなり抱きしめてきて耳元で「マスターから夜の匂いがする」って囁いて何もせずになくなるからズルいんだ」

アキレウス「そこまでするなら抱いてやれよ!?!なんだその生殺し!?!」

ぐだ「ヘクトールにお菓子は無いな!? いたずらするぞ! つて突撃したらパンケーキ作って待ち構えられていた! 悔しい! 美味しい! 美味しい! 何でも出来るなこの男!!!」

ヘクトール「そおら、おかわりいるかい?」

ぐだ「いる〜〜!」

ぐだ「風邪シチュで熱出してる相手に「早くよくなるお注射☆」みたいなノリのやつは、古くからの鉄板みたいなものだけど、実際に風邪引くと熱だの頭痛だの腹痛だの薬の副作用だのでマジ動けないから、陵辱ものならともかく純愛ものではふざけんなってマジレスが……ごほっ、げほっ」

ヘクトール「ここまで熱出たら味覚も飛んでるでしょ? もつたないからメロンは寝かしてりんご切ろうかねえ。はい、あーん」

ぐだ「わーい金でも銀でも銅でも無いさぎさんりんご〜」

ぐだ「髭抜きヘクトールコラとかいうヤバいイケメンを見てしまった! やばい! 今すぐいへクトールのお嫁さんになりたい!」

ヘクトール「本当に髭を剃らなきゃそのうち落ち着くんじやないですかね」

ぐだ「にやーん！」

ヘクトール「マスター、オジサンなんでアステリオスにもふもふされてるの？」

ぐだ「オケアノスのヘクトールとは厳密別人なのにいつまでも気にしてるの律儀だなーって」

ヘクトール「えー？そんなに分かりやすくしてますー？」

ぐだ「んふふふふふふ」

アステリオス「俺とヘクトール、仲良し」ギユウ

ぐだ「仲良しだねー」

ヘクトール「はいはい仲良し仲良し。そのまま潰さないでくれたまえよー」

ヘクトール「マスターがポツキーゲーム誘ってきたから言われた通り端っこ啜えたら真っ赤になって倒れたからそのままマイルームに送ってきた。毎度毎度なあんで自分の限界以上をやりたがるかねえ」

孔明「今しかないからじゃないかね」

ヘクトール「もー、オジサンだから我慢してあげてるものの、年頃の子がそうび

とぴとしちやいけません。普通ならすーぐ襲われちまうんだぜ？」

ぐだ「ヘクトールが大丈夫なら大丈夫じゃない？」

ヘクトール「大丈夫じゃないから言ってるの！」

ぐだ「ご主人様！奴隷のことは奴隷のように扱っていいんですよ！」

ヘクトール「そつかあ。じゃあ奴隷なマスターはオジサンの作ったご飯食べて一緒にいっぱい遊んでオジサンの膝の上で眠ろうなあ。ご主人様の命令はぜったーい」

ぐだ「ああ確かに飼われてる感はある！飼われてる感はあるけれど！」

ぐだ「星4チケットで誰に来てもらおうかな？」

ヘクトール「強い人が来るならオジサンもういなくていいんじゃないかい？」

ぐだ「そういうのいいから。ずっと傍にいて？」

ヘクトール「あ、はい」

ヘクトール「マスターの初恋を自分にしちまったことを本当にもうどうしたもんだか……」

賢王「……まあ、然るべき時に然るべき責任を果たすなら私のほうから言うべきこと

はない」

ヘクトール「然るべきねえ……………ねえ、ひよつとしてなんか見えてる？見えてたりする？」

賢王「さあてな」

ヘクトール「ねえ!!!」

パリス「いい兄さんの日ですね。兄さんの話をしましょう」

ぐだ「おーけー。日が変わるまで聞こうじゃないか」

ヘクトール「HPもNPも回復しない時間の無駄なんだからやめなさい」

ぐだ「ヘクトール！ヘクトール！大変！アキレウス召喚しちゃった！」

ヘクトール「そいつは良かった。バニーか婦長の格好してもらおうなく」

ぐだ「うえ？」

アキレウス「早々に何の嫌がらせだよ！」

ヘクトール「誰のピックアップをすり抜けて来たかを確認してから言え（剣トルフォ・婦長）。マスターが呼んでるのに自分のピックアップで一撃で来なかった君が悪い」

## 第5話

ぐだ「おとーさん……」

ヘクトール「なんだいマスター」

ぐだ「……………」

ヘクトール「んん？」

ぐだ「おとーさんじゃだあ……」ぐすぐす

ヘクトール「自分で言つて泣かないの」よしよし

「ヘクトール。今日は月が大きいよ」

そう言つてマスターは空を指差しはしやいでいる。

漏れる白い吐息がはしやぐ言葉同様に弾んでいるのに移されて、なんだかこちらまで  
楽しくなつてきてしまう。

「マスターはそんなことが楽しいのかい」

「うん。楽しい」

少し意地悪めに言つても機嫌は高揚したままそれはそれは幸福そうな笑みを向けら

れる。

「すごく得した気分。ヘクトールも一緒だからなお得」

「……」

「幸せ！」

屈託のないその身にその心に沁みませながら

「そっか」

ああ、自分が護りたいのはこういうものだったと改めて自覚し、月光に照らされた夜道をふたり手を繋いで歩いていった。

ヘクトール「まあマスターが誰を選んで幸せになろうとオジサンにとってはトロイアだからそれで幸せです。オジサンに出来ることは幸せになるための足掛かり程度ですが子々孫々に至るまで幸せでいてほしいと願っていますよ」

ぐだ「つよい」

ヘクトール「純なマスターの歩幅に合わせて清く正しい愛情を注いでいるオジサンもなかなか純愛適性高いんじゃないかい？」



ロビン「いやーここまでくると清すぎて逆に不健全つすわー」  
槍ニキ「一発くらいヤつててももう誰も文句言わねえぜ？」

ヘクトール「誰が許そうとそれは俺が許さない」

ロビニキ「うわっ」

ぐだ「一番藤丸立香！ヘクトール口説きます！」

ヘクトール「あいよ。どうぞどうぞ」

ぐだ「えつとねえ……好き！」

ヘクトール「うん」

ぐだ「好き！」

ヘクトール「それから？」

ぐだ「好きーーーーー!!!」

ヘクトール「そつかあ。オジサンも」

ロビン「もうちよつと実りのある話してくれませんか!？」

カルデア限定の恋だからこそ忘れられない熱が欲しいぐだとだからこそ余計な傷を  
与えたくないヘクトールなんですよ

マシユ「ヘクトールさんはどうやって先輩を安らかに寝かしつけているんですか？」  
ヘクトール「ん〜？特別なことはしてるつもりはないぜ？服の下に安眠用ポプリ仕込む程度のことではしてるけど、まあ微々たるもんでしょ」

マシユ「とか言つて細々隠し技を仕込んでいるパターンですね。全部吐いてください」

ヘクトール「どうだいマスター。ちよつと本気出せばオジサンもなかなかやるだろう？（モーション改修、マイルームボイス追加など）」

ぐだ「……………えう、あう、えつ、えう、」

ヘクトール「マスター？」

ぐだ「すき」

ヘクトール「ありがとな」

ぐだ「湿布はあげるけど一緒にいてね？どこに貼る？腰？手首？どこ？」

ヘクトール「そっちはそこまで本気にしなくていいから」

ぐだ「ヘクトール去年クリスマスでトナカイ候補つて名乗ったじゃん？自分もトナカ

イなんだけどき」

ヘクトール「毎年お疲れ様です」

ぐだ「まあそれはいいのさ。で、WD礼装がバートロイアでバーテンのマスターだったでしょ？自分もこのとおりへっぽこだけどマスターやってるけど」

ヘクトール「マスターはよくやってると思いますよ？」

ぐだ「そうかなあ。でもありがとね。で、この間どさくさでマンドリカルドのこと後輩呼びしたじゃん？自分にはご存知マシユっていう可愛い可愛い後輩がいるんだけどね」

ヘクトール「いますねえ。せっかくだし今度四人で飯でも食べに行きましようか。ちよつと高めの店でもオジサン奮発して奢っちゃう」

ぐだ「よし言ったな。予定は空ける。絶対行く。で、だ。なんでさりげなーーーーーく藤丸立香とお揃いシリーズ増やしてるの？びっくりする」

ヘクトール「偶然ですよ偶然」

ぐだ「それで済まさないでえ!？」

ぐだ「前にパリスと二人でヘクトールについてプレゼント選んでさ、明日夜にパーティーしてさ、ヘクトール挟んで一緒に寝るんだ。マンドリカルドも来る？楽しいよ

？」

マンドリカルド「滅相もないです!!!!」

ぐだ「ヘクトールがクリスマスだからってケーキ焼いてくれたのー。一緒に食べよー  
いっぱいあるよー」

マンドリ「あのヘクトール様がケーキを  
!?!?!?!?!」

ヘクトール「あのね、マスター。きつかけはアケウスとはいえマスターがオジサン  
を呼んでくれてオジサンがマスターの味方になれたことが嬉しくて嬉しくてね、せつか  
くのクリスマスだしね、」

ぐだ「うん」

ヘクトール「すつごく張り切った（強化クエ）」

ぐだ「馬鹿ッ……!!」

(メディアアさんの性癖について)

▼イアソン「そうそう。オケアノスでヘクトールが召喚された時なんかもさあ」

ぐだ「へえ？」

ヘクトール「違います。何もありません。どさくさで巻き込まないで？」

ヘクトール「現役であることと理性が利いていることは矛盾しないから」

ヘクトールおじさんが一年か数年かに一回しか会わない親戚のぐだのために「あの年頃ならあんまり派手じゃない袋にこれくらい入れておけば適正かな」とかたくさん考えるけどいざ渡すときは「はいこれ。無駄遣いするなよ」の3秒で終わる話に乗り遅れた!!!

牧羊犬ヘクトールが守る羊な弟やマスターや子孫たちが平和に暮らす牧場に先日自信なさげで繊細そうだけど心優しい後輩がやってきました

星を見に行こうと誘ったのは自分で楽しみにしていたのは自分で張り切ってヘクトールの部屋まで迎えに行ったのも自分だというのに、何故気付いたらマイルームのベッドの上なのだろう。

「やらかした」と状況を理解して項垂れる。と同時にサイドテーブルに「また誘ってくれよ」のメモと一緒に軽食とお茶が。

暖かな気遣いに逆に心を痛ませながら口に運ぶサンドイッチは、馴染み深い大変美味な安全安心エミヤ味だった。

ヘクトール「マスター眠れない？じゃあ話をしてあげよう。これはアキレウスとアキレウスに匹敵するほど速い蚊との蚊類史に刻まれた壮大な戦いの話なんだけど」

アキレウス「ねえよそんな話!？」

ヘクトール「今まで黙ってたけどオジサンマスターのこと大好きなんです」

ぐだ「知ってる—————（真っ赤）」

閻魔亭のお風呂でヘクトールが「日本はタオルで髪をまとめるのがマナーなんだって？」と器用にまとめられた頭により見えてしまったうなじにはやややするぐだ

ヘクトール「オジサンこの通り年で体力が落ちてきててねえ、重装備だと流石にアキレウスから逃げるのが大変かなあ」

ぐだ「軽装でも逃げられるのはおかしいよ?」

ぐだ「大人になったら紅先生もつがい認定してくれるもん。ふすまロツクしなくなるもん。同じ部屋に布団並べてくれるようになるもん」

ヘクトール「いや〜〜〜どうでしょうね〜〜〜」

ぐだ「好きです！ヘクトール先生！付き合ってください！」

ヘクトール「本当に先生のが好きなら先生が捕まるような申し出はしない。それが愛つていうものだぞ覚えておくように」

ぐだ「ヘクトールの、おへそ……」

ヘクトール「オジサンお腹冷やすとすぐ具合悪くなっちゃうからだーめ」

ぐだ「ヘクトールもHだね」

ヘクトール「頭文字がね？」

ぐだ「ヘクトールがこちらの処女を貰ってくれないならこちらがヘクトールの処女を貰うべきなんじゃないかなって」

ヘクトール「どうして……」

ぐだ「マンドリカルドがヘクトールのお店（bartロイア）で働いてるなら自分だつて働いていいはずなのでは？」

ヘクトール「あの店ふたりもバイトは必要ないからなあ」

ぐだ「やだああああ、ずるいいいいい」

マンドリカルド「（どうしよう）」

ヘクトール「あ、ちよつとなだめれば治まるから、気にしないでくれたまえ」

ぐだ「最近ノツプたちがマイルームにこたつ持つてこないと思つたらヘクトールの部屋に貸し出してた！くそ！なんて卑劣な罠!!」

ヘクトール「みかんの皮剥いてマスターの口に放る作業めっちゃ楽しい」

ぐだ「アキレウスさつきヘクトールの裸見たの？どんなだった？」

アキレウス「俺視点からは特別言うことと思うことはねえけどマスターは見たら倒れる」

ぐだ「何見たの!?!」



ぐだ「閻魔亭にようこそヘクトール。目一杯おもてなししますね。ほらほらお酌もしますから」

ヘクトール「おおっとマスターにこんなことされるなんて感謝感激。……うん。美味い！」

ぐだ「良かった。ええと次はですnee、」

ヘクトール「……」

ぐだ「ええと……、もう一杯いく？」

ヘクトール「……マスター」

ぐだ「はあい？」

ヘクトール「可愛い」

ぐだ「はい!？」

ヘクトール「可愛い」 ナデナデ

ぐだ「は、はひゃ!？」

ヘクトール「可愛いなあ」 ナデナデナデナデ

ぐだ「はやややややや」

ヘクトール「可愛い」 ナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデ

ぐだ「ひにやあああああ……」

マシユ「誰ですかヘクトールさんが一撃で酩酊するようなお酒選んだ人お!!!」  
後日（ヘクトールが）めちやくちや反省した

うちのヘクトールは管制室隣の物置を突貫で部屋にしてもらったから他の部屋より狭くて暗いし壁も薄い

おかげで管制室での会議をリアタイで把握出来る代わり「聞いているならこつち来て意見を言え」と他鯖にどやされる

代わりに体力が限界のぐだがヘクトールの部屋に滑り込んでベッドに寝落ちる役得にマスターラブ勢が「盲点だった」と悔しがつてる

時折管制室から聞き耳立てられて「しないの!?!」「するでしょ!?!」「原作ならここぞ!?!」  
「君たちがそんなんだからしないんだよ」ってやつてる

マイルームの両隣は一番最初に来たプニキと牛若で固めてる

隙自語

ロビン「契約してるマスターが宿敵のヘクトールに全力ラブってやりづらくねえですか?」

アキレウス「いや? マスターが愛した男の前に最後まで立ち塞がっていた男はその辺

に転がってるやわな男じゃねえ。こんなに強い英雄だったんだぞとより最強最高でいねえとなつて思った」

ロビン「英雄様サマつすねえ……」

ヘクトール「(名状し難いとにかく疲れている顔)」

ぐだ「大丈夫？今日はヘクトールが甘える？甘えていいよ？ほらほらぎゅーっつと抱きしめなさい？」

ヘクトール「ぎゅーっ」

ぐだ「はぎや！（疲れている！本当に疲れている！）」

ヘクトール「寝てるマスターの頬をつついてたら啜えられた。赤子かな？」

ぐだ「サーヴァントのレビュー？えつとヘクトールはねえ、星3でランサーで防御無視全体B宝具で強くなって優しくって戦闘のこといっぱい教えてくれて頼りになつてねえ」

ヘクトール「マスター、途中から雑つていうかレビューになつてない」

ぐだ「好き！」

ヘクトール「(もうしようがねえなって顔)」

ダヴィンチちゃん「君最終的に甘やかすよね」

ぐだのキスの回数が増えるたびにマシユが「ヘクトールさんちよつと」って裏に連れ込むのかあ

ヘクトール「違うんです」

マシユ「何が！どう！違うって言うんですか!!!」

ぐだ「ヘクトール王子様だからハンバーガーとか安っぽいあんまりあんまりでしょ？たまにどう？嫌ならえーと、ファミレスもなあ、どうしょつか」

ヘクトール「そうでもないかなあ。手軽に食べれて便利だからカルデアでも結構頼んでたぜ？」

ぐだ「まず料理人の腕がいいもんねえ」

ヘクトール「カツパ麺とかも好きだぜ？お湯を入れるだけでいいって楽さがいい。文  
明様々」

ぐだ「思ったよりジャンクな王子様だった」

ヘクトール「だが今日は食事も手早く済ませる必要のある戦場でなくゆつくりしてい

い休日だ。好きなどこ行こうぜ。オジサンの奢り」

ぐだ「3000円のパンケーキでも可!?!」

ヘクトール「了解了解。ホテルのあれな」

## 第6話

ぐだ「ヘクトールが眼鏡かけると魅了効果が倍乗するからあんまり他所でかけちゃ駄目だよ？」

パリス「そうです。トロイア全国民が兄さんに恋しちゃうんです。かけてなくても恋しちゃいますけどね」

ヘクトール「ただの老眼だよお？」

ヘクトールは彼氏面どころか国認定してきやがるからな……つまり守護者面なんだけど

ぐだ「やはり制服が似合ううちに制服プレイはしておきたいと思うので好きな制服を選んでください！ダ・ヴィンチちゃんいっぱい作ってくれたよ！」

ヘクトール「どれにしてもオジサンの犯罪臭が直角に龍登りだから全没かな!!!」

ぐだ「弟に背中流させてたなら自分にも流させてくださいよおおおお!!! いっぱい

サービスしますからあああああ!!!

ヘクトール「そういうプレイ弟としてねえですからあああああ!!!」

ヘクトール「マスター抱っこして背中さすってる間に寝落ちるの可愛いなあって思うし子供体温で熱が移るからこっちまでぽかぽか眠くなっちゃう」

ロビン「まず抱きしめた段階で何かしようって気にならないことに疑問しかねえんですが」

ぐだ「きらきらのアーチャー可愛いなあ」

ヘクトール「ふわふわのマスターも可愛いですよ？」

ぐだ「どうしていきなり口説くのきらきら兜のランサー……」

ぐだ「最近ヘクトールファンが増えたからそういう人にはヘクトールってどう見えるんだろってそれとなく聞いてみたら全員から熱い高速詠唱をあげられた、ヘクトールこわい」

ヘクトール「こわくないこわくないオジサンこわくないよ。こっちきてあったかいの食べて一緒にだらだらして眠ろうなくよーしよしよし」

ぐだ「夜のトロイア……へひゃあへひひ」

ヘクトール「普通にある事象だよお？」

ぐだ「一緒にマイルームまで帰って噂されたいな」

ヘクトール「一緒に帰った程度じゃもう噂にもなりやしませんよ」

第三者からのお前の性癖くじを実行する

ぐだ「はいはいはーい！カーマさんヘクトールでやってください！マスター自らくじ引いて実行してみせましょう！はい！」

カーマ「えー、もう私関係ないじゃないですかあ。まあいいですけど。……へえ、ヘクトールさんって地味な風貌なわりにかなりえげつない性癖あったんですね。びつくりです」

ヘクトール「ちよつとお!?!皆してふざけて何書いたの!?!オジサン出来ないからね!?!」

ロビン「いやせつかくだからマスターには大人の階段段飛ばして昇ってもらおうかと」

ヘクトール「毒でシななくても劇薬ではシぬかもしれないでしょ馬鹿じゃないの!?!」



ぐだ「ヘクトールのマントをね、こうカーテンに巻き付く遊びみたい両腕をぐるぐるつと巻き上げられて身動きとれなくなつたところを好きにされたいわけですよ」

ヘクトール「もーマスターはなんでそう発想がDMなのー」

ぐだ「違うのー！ 簀巻きじゃないのー！ 違うのー！」

ヘクトール「そのままおやすみなさい！」

ヘクトール「マスターは初めてリボンラッピングされた清姫を見た時にどう思った!?」

ぐだ「その手があつたかと思つた！（両手いっぱいに分けてもらつたりボン）」

ヘクトール「どうして……！」

ヘクトール「マスター今年もチョコレートいっぱいだな」

ぐだ「んふふ」

ヘクトール「オジサンも今年はちよつとたくさん貰つた（ブラダマンテ、マンドリカルド、ガレスと誘われた円卓数名など）」

ぐだ「……」つねつね

ヘクトール「……？」

ぐだ「……」ぼかぼか

ヘクトール「ま、マスター？」

ぐだ「……」ぶんすこぶんすこ

ヘクトール「も〜〜妬〜かないの！可愛いんだから！」

ヘクトール「マスター、マスターがロボとかメカとか大好きだったのは知っているから、こんな手のひらの木馬じゃ満足出来ないっていうのは分かってるんだけどな、」

ぐだ「うん」

ヘクトール「よそに行かないでいてくれると嬉しいです」

ぐだ「……」

ヘクトール「駄目？」

ぐだ「ううん。ずっと一緒」

ヘクトール「……ありがとな」

ぐだ「だがガチャは回す」

ヘクトール「ええ……」

ヘクトール「それにしてもオデュッセウス来ちやうかあ。来ちやったかあ」

ぐだ「(普通にしてくれてるけどやっぱり国を滅ぼした人がいたら辛いよなあ)」

ヘクトール『木馬は俺の考案なのに散々ネタに使いやがって』って著作権で賠償金とか言われちまうかなあ」

ぐだ「そつちかあ」

R18版FGOについて

ヘクトールルートはR18シーンがある恋人ルートよりでこちゅーで終わる失恋ルートのほうがそれっぽいか分かっていたけどおのれえ

寝言で親を恋しがるマスターを見て辛そうに眉を寄せながら無言で優しく撫でてくれるヘクトールおとーさんはいいですか？

起きたらいつも通りのへにや笑いして「おはよう」っていいながらあつたかいミルクを渡してくれるヘクトールおとーさんはいいですか？

ヘクトール「ほらオジサン王子さまだったから。料理とか全然したことなくて、キッチン部の見よう見まねで作ってみたけど全然マスターの口に合わないだろ？」

ぐだ「嘘をついている味!!!きよひーにバレて変化される前に滅してやるので全てよこすがいい!!!」

ぐだ「男は皆心に獣がいるのでは？自称現役さんの獣はどうなっているんですか」

ヘクトール「それを飼い慣らせないどころか開き直ったり相手に責任転嫁したりする輩は男とは呼べないの」

ぐだ「ぐあッ！」

アキレウス「マスターのことは嫌いじゃねーしむしろいくらでも力を貸してやろうとは、思っているんだが、言動の端々、特にレイシフト中の作戦行動中なんかヘクトールの調きよ、でなく、指導ががっちり行き渡ってんなってのが分かる瞬間が多くて、悪いことじゃないんだが、なんかすげえ引く……」

ロビン「わっかるー」

イアソン「まさかこんなところでお前と意見が合うとは思わなかったぞ」

ぐだ（電話口）『キスしたいから会いに来て』

ヘクトール「キスじゃ済まないから駄目です」

ぐだ（電話口）『ひゃわあわわわわ！』

ヘクトール「（今度は誰に吹き込まれたという顔）」

新茶「ちよつとした冗談のつもりで「マスター君実は処女じゃないんだよ」ってヘクトールに言ったら無言で瞬殺されたよネ……。私はただちよつと「あれで！処女じゃないなら！なんだってえんだ!!」って怒ってほしかつただけなのに……………」

黒髭「どう考えてもあの見せかけなんちゃってちよい悪相手にしていい話じゃねーだろ」

新茶「ワオ、こっちまでマジレス」

ぐだ「レイシフトから帰ってきて礼装脱いで身体強化が解除されて傷口がフィードバックでばくーって開いてくの、最初はびっくりして恐かったけど最近は見てるとちゃんと帰ってこれたんだなあって落ち着く」

ヘクトール「ふざけたこと言っただけでさっさと医務室で処置してもらって寝ちまいな。ほら一緒にいるから、気持ちちゃんと休ませること」

ぐだ「わーい、ぬくぬくー」



## 第7話

アキレウス「マスターとヘクトールがあまりにも進展しねえんでもういつそ俺がまとめて抱くのもありかなって」

ケイローン「ここは古代ギリシャではないのですからマナーに反しますよ。やめておきなさい」

ジーク「古代ギリシャであれば止めていなかったのか？」

ケイローン「はっはっは」

ぐだ「……………うぐ、ええう、」

ダビデ「さてマスター。先日早々即死（別マガ33話）してようやく戻ってこられてからも消沈気味だけどそろそろ回復出来そうかい？」

ぐだ「……ヘクトールはメリイの気持ちに応えるために世界滅ぼせるんだねえ。『藤丸立香』には何が足りないんだろうねえ」

ダビデ「うーん、一緒に命かけて世界を救っているんだから最低でも同程度だと思っただけ」

ぐだ「……」

ダビデ「そういう問題でもなさそうだね」

ぐだ「うえん」

ダビデ「よおし、いつもご愛顧いただいているよしみだ。少しだけサービスしちゃう  
う」

ぐだ「？」

ダビデ「ヘクトールはね、恐いんだよ。君という命が。君という光が。君という未来  
が。少し触れただけで全て穢れて失われてしまうかもと恐くて恐くて仕方ないのさ」

ぐだ「……大したものじゃないよ、自分のなんて」

ダビデ「それでも僕たちには永遠に失われてしまったものさ。だからこそただそこに  
あるだけで愛しく尊い輝きなんだ。何よりも失いたくないと思ってしまう」

ぐだ「それは……それは、他の誰かでも、いや、それは……悪いことではないけれど、」  
ダビデ「さて、そうであるかどうかまではサービス外だね。じっくり考えてちゃんと  
気付いてあげればいい。またのご利用お待ちしております」

ぐだ「ヘクトールがアレス神にまで上げ上げに評価されまくってびっくりした、ヘ  
クトールやっぱりすごい人なんだ恐い」



ヘクトール「確かに昔世話になっていたとはいえオジサンもびっくりして座の裏でひっくり返っちゃった。まだちよつと震えてるからマスターちよつとこつち来てしばらくぴったんこしてよ?」

ぐだ「キリシユタリアがいたら人理修復はどうなつてただらうねえ」

ヘクトール「ひとり増えたところでどうにかなる話じゃなかったさ。それほど変わらないんじゃないのかい? しいて言うならマスターの保護者が増えてたんじやないですかね。ほら見てみなさいよ諦めも大量に含まれたマシユの保母さんのような慈愛のまなざし」

マシユ「いいえそんなくく私なんてまだまだ未熟な未つ子ですよくくくく」

ところでアライメント見ててふと思つたんだが、秩序／中庸勢つて鯖側の気持ち親愛止まりでもマスターが求めたら応じてくれるのではないだろうか

ヘクトール……いやよそう

ぐだ「なんだよう! 諦めるなよう! まだ、まだ頑張れば挽回は、つて目をそらすなあああ!!!」

マシユ「先輩? 先輩こつちきて一緒におやつ食べましょう? ヘクトールさんが焼

いてくれたドーナツツですよ？」

ぐだ「ヘクトールはお胸とお尻どっちが好きなの？」

ヘクトール「マスターが好き」

ぐだ「ぐっ……！ぬぬ………ッ！」

ぐだ「ヘクぐだの場合のヒロインは」

ヘクトール「オジサンヒロインはやれないよ？」

ぐだ「我が男であつたとしてもか」

ヘクトール「……オジサンヒロインはやれないよ？」

ぐだ「ぬぬぬ」

ヘクトール「マスターはオジサンにヒロインになつてほしいのかい？」

ぐだ「……ヘクトールは、ヘクトールでいてほしい」

ヘクトール「でしょー？」

イアソン「何この会話」

ぐだ「もしも自分がどこか道半ばで力尽きたらヘクトールが心臓を食べてくれたら、

一瞬でも糧になれたら、最後まで一緒みたいですごく嬉しいなあ」

ヘクトール「うっとり言ってるけど発想がグロいしオジサン置いてかれるの好きじゃないしジャックは構えないで？」

ぐだ「そういう流れだからマンドリカルドもヘクトールに下克上しようって誘ったら部屋から出てこないの」

ヘクトール「ひでえ無茶振りをしやがる」

敵の返り血まみれになっちゃったからマスターには近寄れないなって離れたところからたはは笑いしてたらぐだが駆け寄りアンド飛び込み抱きつきしてきて参ったなーってなってるヘクトールオジサン無限に可愛いですね

ぐだ「身体が媚薬を毒判定しやがるし相手は仕切り直し持ちだし!!!」

ヘクトール「魅了だったらアウトだった」

ぐだ「このシユメル熱すらはじく鋼の抗体と仕切り直して病気をはじけるヘクトールならば濃厚接触はありなのでは？」

アンデルセン「素人が安易に時事ネタに走るものではないぞマスター。確かにそいつは書きやすいが時期が過ぎると同時に薄ら寒さに襲われ目も当てられん黒歴史となるからな」

ヘクトール「つていうかあと2、3年したらオジサンとして大体が黒歴史になつてるでしょ」

アンデルセン「マスターが夜毎枕に顔を埋めて呻き声と共にベッドで足をばたつかせる姿を見ることが叶わんのは残念なことだ」

ぐだ「何の話〜?」

ヘクトール「……マスターは、あー、オジサンと一緒にいる時に歌が聞こえたりしないかい?」

ぐだ「うん?……ふっ、この藤丸立香、お主と共にある時に聞こえているのは己の鼓動の高鳴りのみよ」

ヘクトール「……そっかあ。いやあよかったよかった。オジサンのドキドキは聞こえていないようで何よりだ」

ぐだ「は!?!へあ!?!してるの!?!一緒にいるとドキドキしてる!?!しちゃう!?!ちよつと一回聞かせてねえねえねえ!?!?!」

ヘクトール「だーめ」

ぐだ「ヘクトールに指ゴム鉄砲教えたらすごく痛い……。見てよ額が真っ赤」  
ロビン「むしろよく頭蓋が砕かれませんでしたね」

ぐだ「メイド服もしくはそれに準ずる使用人服を着てヘクトール様あゝと晩から朝まで隅々とお世話をし尽くしたい人生だった」

ヘクトール「晩から朝まではオジサン寝てるからマスターも寝てていいよ？」

ぐだ「ファーストキスは煙草の味がしたとか言ってみたい」

ヘクトール「(すごく)申し訳ないからやっぱりやめたほうがいいなという顔」

ぐだ「ヘクトールは王子様だからあ！奥様はお姫様でえ！自分がその枠に入るわけにはびえひよおおおお、うえん」

ヘクトール「マスターぐいぐいくるわりにそういう線引きすごい厳しいよね」

ヘクトール「最近マスターが遊んでるゲームのふんふんびえんな羊が、マスターに見

えて、もふもふもふもふ」

ぐだ「ふふふふふ。ドウムジから刈り取って精製したふわもこ衣装の感触を存分に味わうがいいスヤア」

ドウムジ「流石私。ヒーリング効果は抜群です。存分に安らぐといいでしょう。お題はアポロンの嫉妬で十分でしょう」

アポロン「ふんす！」

ヘクトール「マスター結婚しちゃったのかあ。俺以外の人とくっついて言いながら引き出物のバームクーヘン着に酒が飲みたいねえ」

ロビン「それ最終的にやっぱりしんみり寂しくなつて泣いちやうやつでしよ付き合いませんよ」

ヘクトール「ほんじやま。オジサンは帰って寝倒すわ。後始末よろしく」

ぐだ「おう！こつちも帰ったら追撃するから布団あつたためて待つてなよ！」

エリち「はあ!?!かの尊き英霊になんてことさせてるの！最低！外道！邪悪の極み！」  
ぐだ「もてあそびはれてるのはこつちだからせー

ふたもん！！！」

マシユ「自尊心が地底をがち割つて血涙より濃いマグマを噴出させている状態はセーフではありません先輩！」

ぐだ「ダヴィンチちゃんに「どうしても断れない家からの要請で」って何人か騎クラスの人に競馬のお手伝いをお願いしたんだけどね」

ヘクトール「へえくみなさまお疲れ様だねえ」

ぐだ「今知つた風に言いながらチャンネル合わせてるじゃん。馬券も買つちやつてるしさあ、誰の買ったの？」

ヘクトール「いやいや本当に知らなかつたつて。実はオジサンちよつとした気まぐれで馬買つててねえ。今日走るつていうから記念に何枚か買っただけ。ほらこの番号」

ぐだ「……………わあ、マンドリカルドが乗つてる馬だ」

ぐだ「メリイとかペンテさんとかエリちとかさ、ヘクトールはこれからも拗らせ思春期の女の子に出会つたらチョロチョロ付いていつちやうのかなあつて思うと、心がとても虚無くなる。これからもたくさんそういう子に出会いそうだからさ、出会うたびにあー……これは勝てないな……つてなるんだなあ、そのたびにヘクトールを倒さなきゃいけないんだなあつて思うと、心がとても虚無い」

ヘクトール「ま、マスター？ オジサンはマスターのことも大好きですよ？ マスターにもいっだって命かけて全力で愛してますよ？ マスター？ 色なく虚空を眺めてないでこっち見て？ オジサンの話聞いて？ マスター、マスター、マスター……？」



## 第8話

ぐだ「ぎゅつと抱きしめてよしよしするのですランサー！」

ヘクトール「それだけでいいのお？」

ぐだ「待つてちよつと考える！」

ヘクトールは「マスターはオジサンにとつてのトロイアです」と語ることにより自分のSGの中にある椅子ひとつをぐだに分け与えてくれたんだよ（オール妄想総進撃）

ぐだ「なんやかんやあつて闇カジノの商品として回されて仕事に出される前にまず支配人に挨拶しろと連れてこられた先にいたのがヘクトールだった件!？」

ヘクトール「お疲れマスター。じゃ、帰ろつか」

ぐだ「支配人様へのご挨拶なご奉仕は!？」

ヘクトール「折角のやる気なのに悪いなあ。今日でここと関連店舗と流通関係根こそぎ畳んじやうから。忙しくて無理」

ぐだ「王族の話のスケール!!!」

ぐだ「運命って素敵な出会いな捉え方が多いけど悲劇的な言語運用もされるよね」  
ヘクトール「そんなもんはくそくらえでいいんですよ」

ぐだ「よくよく考えたらジャンヌがお姉ちゃんでもあまり問題なくないかなって  
(ぐるぐる)」

ヘクトール「うーん、マスターがそうしたいならオジサン別に構いやしませんけどあの姉と鮫がトロイアにおさまるタマですかね。もつと奔放なアレじゃないかい？」

ぐだ「トロイアは海近いしどうにかなるよー。それで駄目ならきつと発展して海洋都市になってる」

ヘクトール「防衛面としてどうかなあそれ。っていうか一面海なら湿気対策が一番の問題になる気がしてきた。やっぱり籠城するもしなくても日常の快適性が重要なわけ」

ロビン「(どこからツツコめばいいか分からない顔)」

ぐだ「やっぱりヘクトールは好きって言われるよりお父さんって言われたほうが嬉しいのかなあ。でも自分のお父さんは一人だしヘクトールとは全然違うから、お父さん

じやない……好き」

ロビン「あのおっさんあれでめんどくせー人だから今更父親扱いされてもショック受けるだけなんで今のままでいいんですよ」

ぐだ「ヘクトール好きになるならもつとキレイに生まれたかったな」

ヘクトール「いやあ、マスターはこれ以上キレイに生まれてたら神様に拐われてただらうから今でギリギリだなあ。うーん………次は右腕だけじゃ済まなそうだ」

ぐだ「なんかもとやつとする口振り！」

ヘクトール「いやいや普通が一番だって」

アキレウス「（こいつかなり真面目にマスターが神々に連れてかれたらどう奪還するか考えてやがるな？）」

ヘクトール「オジサン一時の誘惑でしんだようなものだからさあ。あんまりマスターに誘惑されると断頭台に連れてかれるような気分になるんだあ」

ぐだ「仮に殴りあいになってもこつちが瞬殺されて終わるだけでは？」

サンソン「そもそもそんな理由で刃は落とさせませんからね？」

清姫「いいえ、普段はますたあが選んだ方だからと一応黙らせてはいただいています

けどあんまり舐めた態度でいるなら全員で容赦なく吊りますし焼きますよ？」

サンソン「え……」

ぐだ「ヘクトールは自分が召喚されて何年経ったと思ってるの!? 確かに鯖に成長とかないかもしれないけど生身のこっちにはあるの! もう子供じゃないの! 分かってる!?!」

ヘクトール「参加条件冬木がある限りマスターはずっとお酒が飲めない子供だよ」

ぐだ「メタ視点になんて負けない!!!」

ぐだ「全部脱がせないままいたすって全部脱がす手間が惜しいほど求められてるって感じでもいいと思います!」

ヘクトール「また変なこと吹き込まれてる……」

ぐだ「つまりヘクトールに薄着で迫ると毎回着せられるのは着衣の自分を自分の手で崩して乱して楽しみたいのでは?」

ヘクトール「そういうことにしといてあげますから無闇に身体冷やす格好しちや駄目ですよ? 何をするにも身体が一番の資本なんですから」

ぐだ「薔薇の名前だったり星の名前だったり山の名前だったりヘクトールはたくさん

の人に愛されてるねえ。まあだからこそ英雄で座に登録されているわけだけど、マンドリカルドとか最早信仰の域だもんねえ」

ヘクトール「でも一緒に世界救おうって呼ばれた影法師のオジサンを愛してくれるのはマスターだけだったのは頭に入れておいて欲しいかな」

ぐだ「……………はへ？」

ヘクトール「オジサンオケアノスであんなに働いたんだから北米まで駆り出すなら追加労働手当が欲しい！」

ぐだ「その前にこっちに心労手当をよこしやがりください!!!抜き打ちにもほどがある!」

ぐだ「ヘクトールが好きな自分がキアラさんには絶対「年上お断り」って言わないって分かってるからかたまに一緒にいるとキアラさんすごく安心してるような顔するんだよね」

ヘクトール「世の中何が救いになるのか分からんもんだねえ」

ぐだ「おはぎ美味しい」

ぐだ「私は恥ずべき卑しいカルデアのマスターなんです……。あ、でもカルデア自体はそれについてなんの罪もないのであしからずなのでええとね、ええと、」

ヘクトール「とりあえずそれっぽそうだからってだけで吹き込まれたとおりに変な言葉を使わないのお！もお今度は誰え!？」

エリち「(卑しいまでは言つてない！卑しいまでは言つてないから違う！多分!)」

ぐだ「嘘おおおお！嘘ですううううう！嘘じゃないけど嘘なの信じて令呪は使わないけど忘れてくださいお願いしますますうううう!!!」

カーマ「あのお、騒がしいのも結構ですけど私の仕掛け以外で騒がれるのは気に障るんですけどお」

マタ・ハリ「ああ、何でもないの。心配しないで。私に酔わされたマスターが抜けるまでずっとヘクトールさんの惚気ばかりだったから、正気に戻ったらこの通りなのよ」

カーマ「はあ？」

マタ・ハリ「べろべろ楽しそうに語り明かしてるマスターも可愛かったし正直普段とあんまり変わらないように見えたんだけどなあ。むしろもつとお付き合いたいくらいなんだけど」

ぐだ「いにやああああ忘れてええええ……………」

ぐだ「ほら新しいOP見てみなさいよ藤丸立香は日々こんなに大人になっているのですよ！いつまでも子供じやないのですよ分かります!？」

ヘクトール「うーんそうだなあ。とりあえず対マスターの理性を再構築させたいからレオニダスが企画してた彷徨海遠泳訓練に参加してこようかなあ」

ぐだ「話聞いてます!?!?!」

マスターを滅茶苦茶にしたい欲とトロイアは傷つけるものではないの己の矜持と毎日マスターを寝かしつけながらぐわんぐわんしてるヘクトールの話ですか？

ぐだ「オケアノスでのメリイとの繋がりを見た後だと北米でのどこかで「俺のマスターはあくまでも彼女です」って申告されそうで今から恐い。そしてそれを受け入れるしかない自分しか出てこなくて辛い」

ヘクトール「マスター、オジサンそんなの言ったこと一回もなかったよな？」

ぐだ「この間の大奥のカーマみたいにき、喚ばれちゃったからまあ仕方なく？本当は嫌だけどこいつしかいないし愛するしかないかあ。みたいに思われてたら辛い。ヘク

トールだけでなく皆もそうだったらと思うと恐くて恐くて恐くて、恐い……」

ヘクトール「マスターもしかして疲れてる？もう今日はこっち来て休みな？」

カーマ「ちよつとお、私の前に私より愛に拗れてる人がいるの困るんですけどお」

ヘクトール「全身全霊心身こめて愛しても伝わらないお年頃ってあるよね」よしよし  
ぎゆうぎゆう

ぐだ「びええええええ………」

ロビン「マスターの場合さつきと抱いてもらえてればここまで拗れなかったんじゃないかなあ」



## 第9話

マシユ「こんなに華麗なエスコートが出来るなんて先輩流石ですね！」

ぐだ「マリーの舞踏会とかにもたまに招待されるからね。マスターたる者エスコートのひとつくらい出来なきゃでしょうってヘクトールがよく練習相手になってくれたんだ」

マシユ「なるほど。やはりヘクトールさんは何でも……ん？先輩がエスコート出来るようにとの練習相手ならヘクトールさんは女性型のステップが踏めるので……？」

ぐだ「あの男の器用さについて真面目に考えると宇宙猫が止まらないから考えないようにしてる」

森の奥で暮らすトロイア兄弟のお菓子の家に迷いこむぐだ兄妹が明るく丁重にもてなされて帰ろうとしても「外は怖い場所なんです。ここでお菓子を食べて羊の面倒を見て暮らしましょう」とか「帰ったところで君たちは歓迎されるのかい？また森に捨てられるんじゃないのかい？」などと言いくるめられてずるずる居座り続ける甘い日々……

アルジュナ「ほら見てくださいマスター。可愛い猿でしょう?」

ぐだ「そうだねえ。ふわふわだねえ。可愛いねえ」

アルジュナ「この人懐っこさと愛らしさ、少しマスターに似ているかもしれないね」  
ぐだ「ふえ?」

アルジュナ「(にこにこ)」

ぐだ「……」

アルジュナ「(なでなで。ふわふわ。ももも)」

ぐだ「……ヘクトール」

ヘクトール「はい。なんですかい? (流石に猿と同じはショックだったか?)」

ぐだ「なでなでしてー」

ヘクトール「りよーかい(いいのかー)」

ぐだ「もるすわあゝ」

式部「睦合う恋人たちが被害者になるのはホラーの定番なので、マスターも今回のレイシフトではヘクトール様との交流は控えていただけねばと」

ぐだ「夜中のベッドのふたりきりで素肌には一切触れずに優しく優しく寝かしつけられてる様を見てカップル認定してくれる殺人鬼様なら拝み倒しながら逝ってやります

わあああああ!!!」

イリヤ「切実!あまりにも切実な嘆き……!でめ私もちよつと気持ち分かっちゃう……!」

エミヤ「模範となるべき子供の前でそんな悲しい開き直りをして泣き崩れるんじゃない!カレーの他にハンバーグも焼いてやるから!」

ぐだ「(キアラさん恋愛トーク苦手なのかあ。キアラさんが近くにいる時はあんまりヘクトールの話しちやいけないかなあ)」

ヘクトール「マスターどしたあ?ぼーつとして」

ぐだ「うへあ!?!……ああ、ええと!へ、ヘクトールのことなんて全然好きじゃないんだからね!」

ヘクトール「うん?」

ぐだ「本当だからね!」

ヘクトール「うーん、そつかあ」

ぐだ「うえ!?!……うう、えう」

ヘクトール「……」

ぐだ「…………嘘ですう、好きい……」

ヘクトール「はっはっはー。無駄なところで無駄に力使って消耗するなんて得策ではないぜマスター」

ぐだ「違うのお、違うのお、無駄な気紛れじゃないの違うのお、」

キアラ「うっふふふふふふ、あらあらまあ特に理由はありませんが槍の雑兵一匹が泡と消えても別に問題ありませんよねえ？滅しましょう。直ちに滅しましょう」

アビー「そうね。マスターの傷は強いかもしれないけどだからこそ今のうちに除去すべきね。私がいるから大丈夫だわ。いきましよう」

マシユ「あの、お二人の気持ちは分かるのですがその、」

エミヤ「ああ見えてストレス溜まりがちなマスターの寝かしつけ係がいなくなるのは少し困るから、やめてもらおうか」

新茶「さて、徐福の支配下に置かれればかの蘭陵王ですら理性が剥がれ本音暴露大会が開催されると判明したわけだが、これを利用して長らく停滞を続けているマスター君とヘクトールとの関係打破にならないかと」

ヘクトール「あんたが本気でそれをしようとするならどれだけ抵抗しようともあ8割方はそうなるだろうさ。だが、俺の本音の重さにマスターが耐えられるかはよつつつく考えてから実行することだな」

新茶「ワオ。開き直った警告の時点でヤバさしかないネ」

若女将藤丸君と庭師ヘクトール……

死角になりやすい木陰とか四畳半くらいの小さな休憩室とかでさ、忙しい合間を縫ってこつそり会いに行くんだよ

ぐだ「駆け出し庭師ヘクトールが藤丸旅館と契約した頃にちようど一子である立香が産まれてさ、仕事で旅館に訪れるたびに自分が手入れた庭を楽しく遊んでくれる子供が自分の腕前が上がっていくと同じく育ていく姿を見守り交流するのが日々の糧として生き年月は流れやがて立香が跡継ぎとして旅館に立つ頃にはっていう、プチ光源氏しちやう話が、思いついちやって、行き場がない」

ヘクトール「いきなりどうしてルルハワテンションがぶり返しちやったの……」

ぐだ「藤丸旅館の最高級客室は常にとある王族が押さえていて、繁盛期とはちよつとずれた時期に王子様が泊まりにくるんだ。それでそのお世話係には必ず若が担当することになって、」

パリス「それは素晴らしいですね！せっかくですしアポロン様も混ぜて一緒に遊びま

しよう！」

ぐだ「え？うん、そうだねえ。4人でゲームとかしたら絶対楽しいね」

パリス「えへへー。楽しみです」

ヘクトール「若さん明日も仕事あるんだから迷惑かけないように子供は早く寝なさいねー」

アキレウス「(弟空気を読め……………ツ！)」

キアラ「そういえばヘクトール様は100人兄弟だそうですね」

ぐだ「あー、らしいねー。兄弟だけでちよつとした集落だよねー」

キアラ「それはそれはさぞ豪胆なお父上だったのでしょね」

ぐだ「おつふお！?そ、そう言われれば、そうだねえ……………はひゃ」

キアラ「その嫡男であるヘクトール様はどれくらい引き継いでいるのでしょうか」

ぐだ「うエツ?!えつと……………どう、どうだろう。ヘクトールという話したからないから……………ええと、奥さんと子供は一人だけとは、聞いてるけど、ええと、」

キアラ「もしかしたらヘクトール様がただ一人を本気で求めた夜というのはかのフェルグス様にも迫るかもしれませんわね。まあまあなんて素晴らしい蜜月でしょう。禁欲中の私では想像しただけで……………ふふふ」

ぐだ「あ、あわわ、ひわわ……、はふえひやああああ」

ロビン「おっさんの胃にニトロロが詰められた瞬間を見た」

エミヤ「この間の仕返しかなあれは……」

イアソン「今更だがマスターの愛がヘクトールに一点集中なのは、ありや全員納得してるのか」

ブーディカ「うーん、まあ、ああ見えて最低限の気配りは誰にでも欠かさない子だから。皆及第点にしてくれてるんじゃないかなあ」

イアソン「そんなもんかねえ」

サンソン「どうか最初の頃のマスターの精神状態は今では想像がつかないほどずっと危うくて、協力してくれるサーヴァントに払える対価が何もないと酷く思い詰めていました」

小次郎「いつ誰に求められてその通りに身体を開くかと危ぶんでいた頃に比べれば何、今のぞつこん状態の身持ちが固いほうが安心よ」

ブーディカ「そうそう納得してもらわなきゃねえ」

イアソン「今やむしろ抱いてやれって感じだがな」

∨身持ちが固い（ヘクトールの良心頼み）

「へクトール「そう！だから！マスターの貞操の防衛ラインをしてるオジサンのことをもつと皆で労つてほしいわけよ！もつとだから怠けて暮らしたい！」」

ぐだ「そ、そんなの気にする必要ないんだよ！もつと心のままにヤンヤンデレデレイケナイトロイアを監禁したり調教したりしていいんだよ？黒ひげが持つてた薄い本みたいに！黒ひげが持つてた薄い本みたいに！」

へクトール「オジサントロイアに対して病んだことないからなあ、分かんない！あと黒ひげは同じ切り口で首刳つてやるから待つてろよ」

ぐだ「教会の制服というのは男女どちらにも良さがぎゅんぎゅん感じますね！ただ纏うだけで背徳感がダンチー！礼拝堂なんかで神様が見てますみたいなベタなものからはじまり、」

へクトール「神様相手に粗相するのは良くないぜマスター、とても、本当に」

ぐだ「じゃあへクトールが藤丸立香専門の神様になって困つてしまえばいいよ！出会つたその瞬間に私は天啓を得ました！主よ、この身を魂を全てを捧げます！」

へクトール「オジサンにそういう力はない……！」

ぐだ「インキュバスは神父や父親の姿で現れるって逸話があるじゃん？なら神父服で



夜這いにかかるのはありなんじゃないかっておっきーの部屋で話してたら、どこからともなく教会系の皆が殺到してそれだけはやめてくれって」

ヘクトール「……ま、まあその辺は流石にねえ、許容出来ないアレだからねえ、うん」

ぐだ「あの天草まで『聖杯持ってきたても駄目』って言ったの。あの天草が」

ヘクトール「無知も純真も悪じゃないけど罪だよねえ……後で菓子折り作ってこう」

ぐだ「むにー」

## 第10話

ぐだ「ヘクトールみたいな常に重い責任が付きまとうストレス過多な環境にいる人は包容力のある年上お姉さんの方が好みなのかもしれない。遅く産まれた時点で負けなのかもしれない。母のような愛が……加護もらってた機神様3倍的な赤さだし」

ヘクトール「神様の加護で趣味嗜好は変わらないからオジサンの好みは赤い3倍じゃないよお!」

「昼頃に気付いたけど趣味嗜好が赤い3倍なら好きなのは年上お姉さんでなく聖母系少女では

どちらにしてもヘクトールは全力で否定するのだと思うが

ぐだ「令呪をもって命ずる!ヘクトール!手を繋いでください!!!」

ヘクトール「はいはい。いいですよ。そらぎゅーつと」

ぐだ「はひゃひゃひゃひゃ」

黒髭「などと涼しい顔で応じつつも令呪というでかいリソースに普通に頼めば済むささやかな願望を真っ赤な顔して全力で乗せるマスターの善良な小市民っぷりに内心煽

られまくってる先生でした！」

ヘクトール「黙ってる」

カルナ「俺の装備のふわふわな部分で昼寝をして太陽の加護を受けてぽかぽかになったマスターを最近冷えて関節が堪えるとぼやくヘクトールに渡してから数時間。ヘクトールの部屋からマスターの悲鳴が聞こえる」

カルナ（2 臨）の赤いところがふわふわ気持ちよさそうと思ってたけど改めて見ると炎のようにも見えてきた

ふわふわの炎……？

ヘクトール「マスターの可愛いなって思うところ？ そうだなあ。寝かすつけてからしばらくすると猫みたいにオジサンのほうに頭をこすりつけてくるのが可愛いかなあ」

ロビン「ううわっ！ 普通にノロケられた！」

黒ひげ「爆ぜればいいのに！ 霊核の髓の隅々に至るまで爆ぜればいいのに！！」

ヘクトール「そっちから聞いて何!? 何がしたいの!?!」

ぐだ「すぐそこにいる人が何もしてくれないなまごろしはマイルドな拷問になりませ

んかね……」

ヘクトール「果たして拷問状態なのはオジサンなのかマスターなのかどちらなのかねえ」

ぐだ「ヘクトール様……どうかこの愚鈍な民にお導きを」

ヘクトール「うーん、オジサン偉そうにするの生前でもう飽きちやったからさあ」

ぐだ「……」

ヘクトール「マスターとは今まで通りでいられたらオジサン幸せだなあ」

ぐだ「………しょうがないにやあ。頑張るよ」

ヘクトール「ありがとさん」

ヘクトール「ちゃんと守ってくれる人ならマスターには別にオジサンじゃなくてもいいんじゃないかなー？とはまあ思うことも多いかな」

ぐだ「でもあの時一緒にいてくれたのはヘクトールだし」

ヘクトール「どの時？」

ぐだ「あの、………ん？あの、あの、………あの、んん……、あの時」

ヘクトール「どの時……」

ヘクトールがぐだと最後の一线を越える覚悟を迎える時とはどういうものか予想はつかないけどとても甘くて優しい時間にしてくれるに違いないんだ

「勝ってくれヘクトール！人類のためでも世界のためでも誰のためでもない、オレだけのために!!」って台詞がよぎって一日うふふとしてたけれどぐだがそういうこと言わない……

ぐだ「藤丸でも立香でもいいからたまにはマスターじゃなくて名前と呼ばれたいな」  
ヘクトール「えー、今まで呼んだことないからオジサン恥ずかしいなあ。耳元でこっそりでいい？」

ぐだ「待つてそのイケボにそんなことされたら恥ずかしい！」

ヘクトール「ヘクトール先生の木工講座〜」

ぐだ「先生木馬の作り方教えて木馬の作り方〜」

ヘクトール「あれはねえ、特別な時にしか作らないからねえ、駄目なの〜」

ヘクトール「無知で無自覚なくせにおかしく耳年増な我がマスターの話してましたあ!? まっさらすぎて逆にどうしたらいいか分かんない!」

ぐだ「貴方色に染めればいいと思う!」

ヘクトール「責任も取れないのにこれ以上おかしな性癖は持たせられないの!」

ぐだ「まだ見せてもらってないおかしな癖があるの!」

ヘクトール「言葉の綾あ!」

ダヴィンチちゃん「言っちゃなんだがもう手遅れだと思うぜ?」

齋藤「僕新人なんでよく分かんないんですけどお、実際マスターちゃんのこと襲おうと思つて踏み止まったこと何回あるんです?」

ヘクトール「ん? 最初から話すと千夜一夜になるけど構わないかい?」

齋藤「すいませんやっぱいいです」

ぐだ「最早ヘクトールにどのタイミングで「お菓子くれなきやいたずらしちゃうぞ」を発動させてもいたずらには到れないと学んだので! 今年は「お菓子くれたらご褒美を与えましょう!」にチェンジした結果! 子供たちがお菓子握りしめて震えだしてしまったので、これから子供たちと詫びお菓子ぱーちーしてきます」

ヘクトール「追加分は後で作って配達に行くからごゆっくりね」

アキレウス「マスターの国の言葉に据え膳食わぬは男の恥って言葉があつてだな」

ヘクトール「俺が恥かくだけで守られる聖域があるなら安いつてもんよ。武士は食わねど高楊枝つてな」

アキレウス「おのれあ言えばこう言う……！」

ぐだ「ヘクトールの『ガキ』呼びはネロ様やエリちゃんの声級に殺傷力があるって分かつてます？」

ヘクトール「余程じゃない限りもう言わないよ」

ぐだ「今でもたまにこちらが忘れた頃に言つて……」

ヘクトール「ええ……」

ぐだ「豪華客船でまったりふたり旅とかしてみたいな」

ヘクトール「悪かないかなあ。余計な贅沢せずに部屋代だけならそこまで高くないつて話らしいしなあ」

ぐだ「そうなる暇な時間が多くなつてふたりですることと決まってくるわけで」

ヘクトール「船酔いしたマスターの看病が主要になるかなあ」

ぐだ「ゴツホちゃんか鬱ぶち抜いて狂乱しただから落ち着くまで手を握ってたらしのまま寝落ちちやつた。……もしかして、ヘクトールが自分を寝かしつけている時もあるな心境」

ヘクトール「……8割、くらいは」

ぐだ「んぎゃあ」

ぐだ「ゴツホちゃんと一緒に寝て起きるといつも間にアポロン様のぬいぐるみがいる。たまに複数」

ヘクトール「焼け」

ぐだ「いい夫婦の日と聞くときつと自分はいいい死に方しないんだらうなあとか死後も許されざる者が行く場所に流されるんだらうなあとか、そんな気持ちになります」

ヘクトール「とりあえずなんも考えずにいつも通りオジサンを枕にして日を越せばいいんじゃないかなあ。ほらお気に入り安眠グッズがたくさん揃ってるぜ〜?」

パリス「明日はいい兄さんの日なのでいっぱいお話ししようね〜」



ヘクトール「マスターの合成音声が流行ってる？」

ダ・ヴィンチ「そう！今までの観測データを使ってこのダ・ヴィンチちゃんがちよちよいとね！これでマスターと離ればなれの任務の時でも寂しくないって寸法さ！」

ヘクトール「ふんふん。なるほど。確かにこりやよく出来てる」

ダ・ヴィンチ「だろう？甘かったり爽やかだったりそれぞれの好みに合わせた多数のラインナップが目白押しさ。君もおひとつどうだい？」

ヘクトール「そいつはありがたい。でもやっぱり本人直々の声が一番なんじゃねえかなあ」

ダ・ヴィンチ「その本人からの愛を独占している君がそれを言ったらもう戦争しかないよ。」

ロビン「はいもしもしわざわざ通信で何かご用ですかいマスター。……はい？……はい。はい。はい。それはむしろチャンスなのは？あー、はい、はい。はい。はい。今行くんて泣かないでください。はいはいいいお茶用意してくださいよ。わりい皆この卓は流しといてくれ。マスターの部屋に行くてくる」

黒髭「お？ペナルティは重ねておきますぞ」

ビリー「何かトラブル？」

ロビン「なんてことねえよ。ちよつとした騒動でずぶ濡れになったヘクトールのおつさんに部屋のシャワー貸したら段々恥ずかしくなってきたから知らねえ顔して遊びに来てほしいってさ。放置でも面白いけど行ってやらにや可哀想でしょ」

ダビデ「本当に可愛すぎでどうしようもない人だねえ」

黒髭「ならば拙者も野次馬にあずかり先生の何にも言えねえ顔を観賞いたしますぞ」

## 第11話

ロマニ「最近マスターのヘクトールの部屋からの朝帰りが多すぎるといふ苦情のもと、ヘクトールが留守の間にこつそり設置した監視カメラで8時間丸々ヘクトールに添い寝されてすやすやしてる姿を睡眠時間を削って皆と見守ってた僕を誰か労って……」

マシユ「それは大層大変な作業でしたね。どれほどの労を尽くしたのか実際にやってみないと理解出来ず相応の労いを果たすことが難しいのでまずそのデータをノーカットで下さい」

ロマニ「ひえ」

(平安京酒呑によるマスター評について)

ヘクトール「分かる!!!それ!正にそれ!!マスターは!身体が大きくなっただけのドガキな雛!!!」

ぐだ「子供じゃないもおおおおん!!!」

パリス「今年もそろそろクリスマスですね!今年も去年と同じくマスターとヘクトー



前のように肌を撫であっているかのようなそういう空気感があのそれふえあああのあのあの!!!!しまししょう!」

ヘクトール「よし寝ようかマスター!なんか情緒が熱暴走して脳機能が潰れてるから一回休んで落ち着こうな!」

ヘクトール「オジサンがヤンデレ?やめといたほうがいいんじゃない?ただでさえマスターぎりぎりのところで踏ん張ってるんだから、オジサンまで病んで足首掴んで引きずろうもんならそのまま二人の世界に……とうてい人類史詰むぜえ?やめとけやめとけ」

おつき「当然のように告げられる勝利者宣言が嘘偽りなさすぎてやっぱりきよひーに焼き尽くされるやつう!」

ヘクトール「まあ病まなくても出来るけど」

ロビン「やめーや」

ぐだ「クリスマスです!例のあれの時間です!6時間たっぷり愛してください!」

ヘクトール「マスター、神さまの誕生日に神さまを蔑ろにしたらどうなると思う?」

ぐだ「えう?」

ヘクトール「ど う な る と お も う ？ 」

ぐだ「えうううう、そういう時代の人にそういうこと言われるとおおおお、」

ヘクトール「大体そんな区切られた狭い時間に限らずオジサンはマスターのこと24時間365日愛しまくっているんですがねえ。分かってもらえてない？」

ぐだ「うええええ誤魔化されてるう、すり替えられてるのは分かるのにうえええ馬鹿あああああ」

ヘクトール「はいはい。寝ましようねえ」

ぐだ「自分ひとりじゃ何も出来ないからとたくさんの英雄さんたちに協力していただくうと手当たり次第呼びまくっているにもかかわらず当の召喚主である自分はヘクトールばかりに心が傾倒していることに本当に心底申し訳ないと思っていたのにもかしてこれってわりと普通のことだったのかなあ……いやでもさあ、いやあっちの自分を否定したいわけでもないんだけど、自分は、自分は、あの、あの、あの………」

ヘクトール「つて皆で年末にテレビ見てから熱出しっぱなしだったんだけどまさか3日丸ごと寝込まれるとは……朝までには持ち直すって言ってるからその辺には触れずにいつも通りに頼むよ」

マシユ「新年の挨拶以降お見かけしなかったのはそういう……」

ホームズ「てつきり年越しに皆ではしやぎすぎたから顔色が悪いと思っ  
ていたが」  
ゴツフ「(てつきりそうだと思っ  
て普通に注意してしまっ  
たという顔)」  
ダヴィンチちゃん「やっぱ  
りちよつと真面目すぎる  
よねえあの子」

ヘクトール「最近マスターに舐められてる気がする。「ど  
ーせ何もしないんでしょ」  
つて引っ付いて喉鳴らして  
る。おかしい。オジサン  
現役なのに」

黒髭「でも何もしない  
んでしょ?」

ヘクトール「傷になっ  
たら困るじゃん」

黒髭「てめえマジでな  
んなんだよ」

ヘクトール「おやー?  
どしたマスターエプロ  
ンつけて料理なんて」

ぐだ「へへー。村正お  
じいちゃんがね、ご飯  
作ったら口ハだつて言  
うから」

ヘクトール「そうかい  
そうかい。頑張れよ。  
それにしてもエプロン  
つけて料理なんて  
まあ、まるでお嫁さ、」

村正「よおマスター。飯  
出来たか?お、なんか  
奉公しにきた丁稚みて  
えだな。似合っ  
てるぞ」

ヘクトール「……ん?  
あ!?……………ツ!  
……………ツ!  
……………ツ!!」

村正「なんだありや」

エミヤ「知らぬ間に随分子供の情に絆され流されていると気付いた男の悶絶だ。気にするな。いいから手を洗って座っているように」

ブーデイカ「マスターが気付いてないだけで結構あとちよつとであと一歩つて感じよ  
ねえ」